# 「闘魂」部室建設記念号　目　次


はじめに …… 1

Ⅰ　新部室完成にあたって

東大サッカー部の部室のこと　ＬＢ会・会長　高山　英華 …… 2

新部室完成にあたって　部　長　西本　晃二 …… 3

御礼の言葉　部室建設募金委員会・委員長　岡野俊一郎 …… 4

Ⅱ　新部室建設に関する資料

本郷記念館（仮称）建設に伴う要望書　（昭和57年11月30日付） …… 5

本郷記念館（仮称）建設工事遅延に伴う要望書　（昭和60年12月19日付） …… 8

本郷記念館（仮称）建設に伴う要望書（再）　（昭和62年３月６日付） …… 12

本郷記念館（仮称）建設に伴う要望書（三）
——サッカー・グラウンドの農学部キャンパス移転に関する要望書——
（昭和62年５月15日付） …… 15

要望書——農学部グラウンド整備について——　（昭和63年６月７日付） …… 22

新部室案図面　昭和44年卒　永峰　富一 …… 23

新部室最終図面　東京大学施設部

募金趣意書　（昭和63年６月29日付） …… 26

部室建設募金・再度のお願い　（昭和63年10月20日付） …… 36

Ⅲ　回想・部史・雑感

あのころ　昭和19年９月卒　齋藤　賢吾 …… 46

部史（昭和21年～昭和26年追補）

創刊号より20数年を経て　昭和19年９月卒　須賀　敏孝 …… 57

農学部の合宿所　昭和35年卒　小山冨士夫 …… 59

新部室建設にあたり——雑感　昭和50年卒　吉澤　伸明 …… 62

Ⅳ　監督・主将から

新部室・生かすも殺すも……　監　督　平林　健一 …… 65

主将を務め終えて　昭和63年度主将　大久保将之 …… 66

東大のサッカー　平成元年度主将　住谷　安史 …… 68

Ⅴ　ＯＢからの近況 …… 69

Ⅵ　東京大学ア式蹴球部部室建設募金者名簿 …… 76

Ⅶ　広告協賛企業一覧 …… 79

Ⅷ　昭和63年度　東京大学ア式蹴球部名簿 …… 83

編集後記 ……134

# はじめに

御殿下グラウンド地下に東大創立百年記念体育館が建設されることが決定されたのは昭和57年のことであった。その後の一連の情況の推移の過程で、われわれア式蹴球部は、部創設以来70年にわたって活動の本拠地であった御殿下グラウンドを離れ、農学部キャンパスにホーム・グラウンドを移さざるを得ぬこととなった。そして、既に昨年の5月に終了した新グラウンドの拡充・整備に続き、このたび、のべ6年余りの歳月を経て、ようやく新部室完成の運びとなった。

この機に、今後永く全東大サッカーの拠点となるべき新部室の完成にいたる経過を、「闘魂」部室建設記念号として残しておこうというのが本号刊行の趣旨である。本来は昭和50年発行の「闘魂」3号の後を受けて、ここ10数年間の部史などをも盛り込んだ「闘魂第4号」とするべきであるが、諸般の事情もあり、今回はこの形に落ち着くこととなった。

念願の関東リーグに復帰を果たした暁には、改めて「闘魂4号」として充実した部史を発行したいと考えており、また近い将来、必ずやこれを実現すべくさらなる努力を重ねる所存であるので、OB諸兄のご了承をお願いいたす次第である。

最後に、原稿をお寄せ頂いた先輩、ならびに本号の編集にご尽力いただいた鳩貝由美女史をはじめ東大教材部の皆様に、この場をかりて厚く御礼申し上げる。

平成元年2月

東京大学ア式蹴球部

部長　西本晃二

# Ⅰ　新部室完成にあたって

## 東大サッカー部の部室のこと

LB会・会長　　高　山　英　華

東大サッカーの部室と、グラウンドが本郷の農学部構内に出来ることとなった。

それを記念して何か想い出を書けということなので思いつくままに述べてみる。

僕が東大に入ったのは、昭和６年の春であった。その頃は御殿下のグラウンドは、一周300mほどのトラックが主で、それを覆ってサッカーやラグビーのグラウンドとして併用しておった。そして、その西北の隅に、柔道場や食堂などの木造の建物があった。病院側には立派な桜並木があり、夏目漱石の小説の舞台にもなったところでもあった。

その柔道場の脇に、小さな６坪ほどの木造バラックがあり、これが部室であった。

僕が入った昭和６年は、東大が６連覇をつづけていた最後の年でもあった。

竹腰ノコさんが監督で、高山忠雄さん、鈴木駿さんたちの先輩が毎日練習にきてくれていた。

主将は手島さんで、野沢さん、竹内さんなどが上級生であった。

その小さな部室で、ユニホームに着がえをして練習するのであるが、そこで、ミクニのオジサンと、鈴木の駿さんが何時も早くからボールに空気を入れていた。駿さんはボールの空気の入れ方や革の質などに非常にきびしい方であって、これがミクニのボールの質を向上させた大きな原因であったと思う。

その後、蹴球部の部長さんであった内田洋三先生の御尽力でグラウンドは整備拡充され、病院側の地下にコンクリート造の部室がつくられシャワーなどの設備もととのえられた。

病院側の桜並木はなくなったが、グラウンドには砂が入れられ整備されるようになった。

今度は、このグラウンドの北側の大部分が、地下の学生のためのいろいろの施設として大改造されている。これは東大百周年記念事業の一環として行われているものである。なおいわゆる山上御殿は震災で焼け、その後木造で再建されたが、先生方の昼食や学生たちの会合の場所として使われていた。設計は建築の岸田日出刀先生であった。この建物も百年記念で、建て直され、立派なコンクリート造のものとなり、集会や外国人の宿泊などに使われている。設計は、建築の先輩の前川国男さんである。

現在工事中の地下の施設はやはり建築の先輩の芦原義信さんの設計である。

僕は昭和６年の一年生のときに優勝したがその後は優勝出来なかった。部室は粗末のも

のであったがその時の東大は強かった。夏休みの合宿には石神井のお寺の広間で寝泊りして隣接のグラウンドで練習した想い出も忘れられない。

今度、立派なグラウンドと部室が出来たのだから東大のサッカー部ももっと強くなって貰いたいものである。

## 新部室完成にあたって

東京大学ア式蹴球部
部　長　　西　本　晃　二

多年の懸案であった新グラウンドおよび新部室が、いよいよ完成の運びとなった。まことに御同慶にたえない。

ふり返ってみると、厳しい交渉の連続の6年間であった。資料として本号に収録した要望書、図面等を御覧いただけば判るとおり、東京大学創立百年を記念する事業の一環として、御殿下グラウンド地下に屋内体育施設を建設することが決定されたのは昭和57年のことであった。

以後、実際の工事が開始された昭和57年夏（この年のリーグ戦から同グラウンドは使用不可能）から → 埋蔵文化財の出土 → いつ終わるとも知れぬ考古学的発掘調査 → 体育施設完成後、その屋上を埋め戻して復旧するグラウンドを人工芝化するという大学側の提案 → それなら部創設以来70年の歴史を経たホーム・グラウンドを、この際思い切って農学部キャパスに移すという当部の決定 → これに伴う農グラウンドの拡充・整備、および新部室の建設 → 新部室建設のための我々の設計案作成ならびに募金運動と、目まぐるしく変わる情勢の変化に応じて、そのつど生起してくる新たな問題の応接にいとまのない年月であった。

出だしの、屋内体育施設建設（当初20ケ月の予定）候補地を御殿下グラウンドとする案を受け入れるかどうかの決定を迫られた時から、相談にのっていただいた、南谷尚志（当時監督、昭51年）、渡辺洋三（前部長、昭22年）、須賀敏孝（元監督、昭19年）、浅見俊雄（元監督、昭31年）、小山冨士夫（LB会幹事長、昭35年）の諸先輩方、また最終段階での部室建設のための具体的設計ならびに募金活動に、一方ならぬ御協力をいただいた永峰富一（設計、昭44年）、手島直幸（募金、昭47年）の両先輩、そして特にグラウンドも碌になく、苦しい部活動を強いられたこの期間を通してあらゆる局面に関わり、かつあるいは部を率いてくれた現監督の平林健一（昭55年）、あるいは現役を鼓舞してくれた吉澤伸明（元

監督、昭50年)、兵頭圭介（前監督、昭50年）のお三方、これらの方々の御力添えには感謝の言葉もない。

それだけではない、お名前をいちいち挙げることはしないが、折りにふれれて適切な助言や励ましの言葉を下さった諸兄、また大きな募金目標額の達成に御協力をいただいた諸兄、そして事の成り行きとはいいながら、ホーム・グラウンドなしの部生活を耐え忍んで、今は先輩の仲間に入った若手OB諸兄、これらの方々にも心からお礼を申し上げたい。

こうして我々東大ア式蹴球部関係者の総意と総力を結集して新しいグラウンドと部室を獲得した以上、これを最大限に活用して、全東大サッカーの、ひいては日本サッカーの流れを変えて行く拠点としたいというのが、部の直接運営に携わる者達の切なる希いである。今後も諸先輩方のいっそうの御指導と御鞭撻のほどをお願いいたし、御挨拶といたす次第である。

## 御 礼 の 言 葉

平成元年１月

関係各位

東京大学ア式蹴球部室建設募金委員会
委員長　　岡　野　俊一郎

このたび東京大学ア式蹴球部ホーム・グラウンドの農学部キャンパス移転にともない、新部室を建設するに当り、LB会メンバー諸兄、ならびに関係団体に募金をお願いしたところ、関係各位の絶大なる御協力をいただき、募金目標額１千万円を達成することができました。

ここに御協力を賜わりました方々に心から御礼を申し上げます。また同部室建設を関連事業と認定、１千４百万円の事業支出をいただいた「東京大学創立百年記念事業委員会」、学内における建設に種々の御高配をいただいた「東京大学運動会」ならびに「東京大学施設部」、「東京大学学生部」に対しても心からの感謝を申し上げます。

今後は新部室および、それと一体となった新グラウンドを十二分に活用し、東京大学を代表し皆様の期待に応えて大いに活躍すべく努力いたすとともに、学内スポーツとしてのサッカーの振興にも寄与して行く所存ですので、なおいっそうの御指導と御協力をお願い申し上げる次第です。

# Ⅱ　新部室建設に関する資料

## 本郷記念館（仮称）建設に伴う要望書

昭和57年11月30日

東京大学総長
平　野　龍　一　殿

東京大学ア式蹴球部部長
西　本　晃　二
LB会代表幹事
渡　辺　洋　三

このたび東京大学評議会において、かねてより東京大学創立百年記念事業委員会から寄附行為の申出があった本郷記念館（仮称）の建設地を、御殿下グラウンド地下とする旨の決定がなされました。同館の建設は、本学創立百年を記念する事業の一環であり、大学の一員であると同時に、本郷地区における体育施設の不足を痛感しているア式蹴球部としても、これにまったく異存はございません。

ただ、建設予定地としてこのたび決定された御殿下グラウンドを本拠地とし、部創設以来、日々の練習、公式試合、練習試合、その他部活動の全てをここで行い、今日におよんでいる当部といたしましては、(一)記念館建設工事期間（20ケ月）中、グラウンドの使用が全面的に不可能になる、(二)記念館建設のため、従来より使用してきた部室が取り壊される、(三)記念館が建設された上で、その屋根上を埋め戻し、ふたたびグラウンドとして使用する計画である。以上の三点にかんがみ、東京大学として下記の諸項目につき特段の御配慮をいただきたく、お願いいたす次第であります。

記

1．建設期間中の部活動について

1)　原則として、農学部グラウンドにおいて練習を行う。従って、

①　火～土の内４日割当てをいただきたい。(15：00～18：00)

②　日・祭日は検見川を優先的に使用させていただきたい。

2)　農学部グラウンドの改修並びに施設整備として、次の諸点を要望する。

①　部員の安全・負傷防止のため、グラウンドの改修、土の入換え、整地等。

② 御殿下グラウンドの部室閉鎖のため、仮設のロッカー（50名分）シャワー、トイレを備えつける。（シャワー、トイレは50名が使用することが前提である。）

③ ボール、石灰、ラインカー、レーキ等、器具庫の設置。

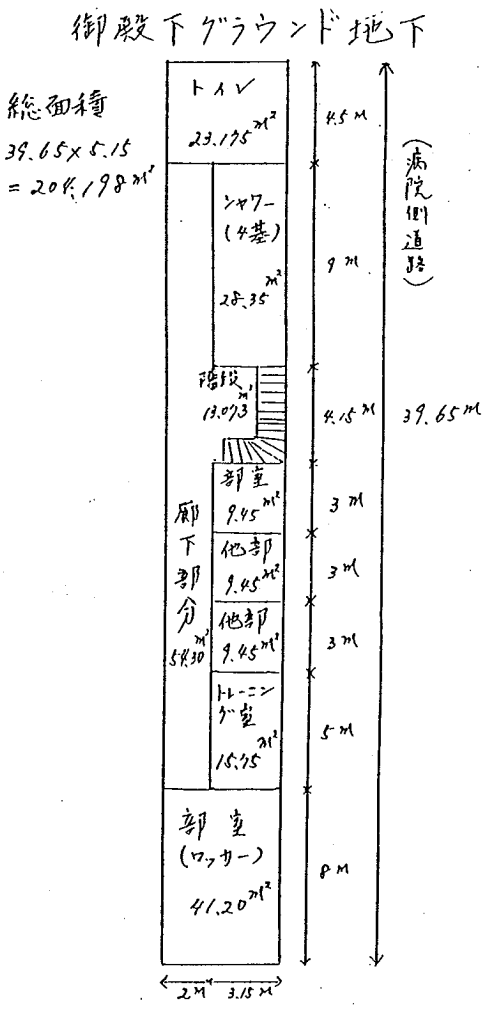
④ 仮設の照明設備を備える。（御殿下完成後、移転する。）

⑤ シュート板を備えつけると共に、高さ10m程のネットフェンスをめぐらせてボールの飛び出しを防ぐ。

2．部室について

1） 最低限、現状と同じスペースを確保していただきたい。

2） かつ、現状では、対戦チームの更衣等をグラウンドで行っている有様であり、対戦チーム用のスペースも確保していただきたい。




具体的設備

① シャワー（4基以上）
　トイレ（50名の使用が前提）

② トレーニングルーム

③ ミーティングルーム

④ ロッカールーム（50名分）

⑤ 対戦チーム用控室（25名分ロッカー付）

⑥ 器具庫（ボールその他収納用）

⑦ リネンルーム（洗濯機、乾燥機付）

⑧ 冷蔵庫（製氷、薬品保存のため）

3） 現時点での部室設計では、とても現状並のスペースを獲得することはむずかしい。代案として次の3つが考えられる。

① 階段のスペースが大きすぎる。らせん階段でよいから、部室として使える面積を広くとる。

② あるいは体育館へ通じる階段を共用する。壁には最小限の通路（例えば船内ドア）をあける。

③ 記念館への併設をあきらめ、七徳堂側にずらし、地下水槽建設時に東側部分にスペースをつくる。

我々としては③案を要望したい。

3．建設後の部活動について

1)　この機会に、明治以来、これといって改修されていない御殿下グラウンドの全面改修を要望する。

①　グラウンド全面の排水設備を整備する。

○記念館のコンクリート屋根をうまく設計し、排水設備を合理的に組み合わせる。

○グラウンド残り半面についても、排水設備を整備する。

②　水はけの良い土の導入。

○コンクリート屋根上50cm厚でなく１mにする。

③　スプリンクラーの設置。

○ほこり防止のためにも是非必要である。

④　現在の石塀を取り払い、御殿山を削り、横幅67m、縦105mのサッカーフィールドがとれるようにし、かつ両側５m、ゴール裏10mの余裕地をとる。

⑤　周囲全面に少なくとも高さ10mのネットフェンスをめぐらせボールの飛び出しを防ぐと共に、入場者制限も可能とし、グラウンド状態維持管理を容易にする。

⑥　照明設備を設け、特に冬季夕刻の練習を容易にすると共に夜間練習、試合を可能とする。

⑦　観客席を設け、観戦・応援のための場を作る。

⑧　その他、付帯設備として以下のものを要望する。

○ペンデル柱（高さ７m以上）４本→ネットフェンス支柱との共用可能。

○シュート板→特にモール側のネットフェンス下部は全面シュート板とする。

○得点掲示板。

2)　原則としてグラウンドは以下の時間を当部が優先的に使用のこととする。

○平　　日　：　15時以降

○土・祭日　：　13時以降

○日 曜 日　：　10時以降

以　　上

# 本郷記念館（仮称）建設工事遅延に伴う要望書

昭和60年12月19日

学生部学生課長

磯　脇　和　平　殿

東京大学ア式蹴球部長

西　本　晃　二

謹啓

御存知の通り東京大学ア式蹴球部は、創設以来御殿下グラウンドを本拠地として活動を行ってまいりました。しかるに昭和58年夏に開始された本郷記念館（仮称）建設工事に伴い、同グラウンドの使用が不可能となり、農学部グラウンドを代替使用して現在に至っております。

しかし農学部グラウンドは、正規のグラウンドとしては縦横ともに長さが足りず、練習には難渋いたしております。

当部といたしましては、一日も早く御殿下グラウンドへの復帰が叶うことを希っており、この点について御高配をお願い申し上げます。

しかし、現状では農学部グラウンドおよび隣接の仮部室を使用して行く他には方法がなく、かつ聞くところによりますと御殿下グラウンドの埋蔵文化財発掘作業の遅延に伴う、本郷記念館（仮称）建設工事全体の遅れは少なくとも向後４年に及ぶとのことであります。

そこで、①　仮部室の増築および改修。

②　トレーニング・ルームの建設。

③　照明灯の増設。

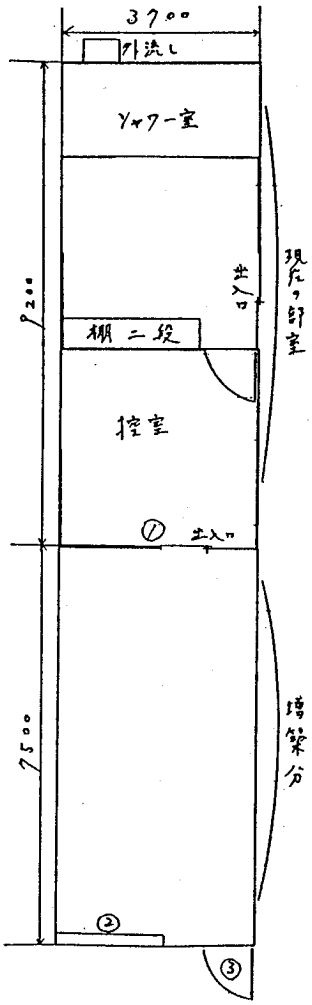
以上の３点を中心とする施設の改善方をお願いする次第であります。

記：要望の詳細については、別添資料を御参照下さい。

別 添 資 料

1．仮部室の増築、及び改修等について

1) ここ数年の部員数は30～50名で、現在のスペースでは大変狭く、更衣にも支障をきたしており、さらに対戦チームの更衣等は屋外で行っている有様であり、控室を右図の様に最低限7.5m×3.7m分増築して頂きたくお願い申し上げます。




○仕様――右図において：

①の仕切りは取りはずして増築分とつなげる。

②の部分に50名用の下駄箱となる三段の棚を設置する。

③の増築分出入口は、現状の引き戸ではロックが不十分なため、図示の様なドアにする。

④窓の部分には、盗難等防止のため鉄格子を取り付ける。

⑤上記の他（基礎、外・内装、電気、窓の個数・位置など）は、最低限現状と同様にして頂くことを要望します。

2) 改修並びに付帯設備の整備として次の諸点を要望致します。

① 現在の二基の給湯器（記号む－18番号187,188、12A23,100Kcal／h、最低作動水圧0.5Kg／ ）の能力が低いためか、あるいは水圧不足のためかは不明なものの、秋以後水温が低下すると湯温が不十分であります。さらに、給湯器の一基が不調なため、４本のシャワーの内１本しか使用出来ない場合があり、非常に不便で、また健康上も好ましくないと思われますので、能力十分な給湯器とポンプを設置して、常時４本のシャワーを使える様にする。

② 窓を修理、補強する。

ｉ）野球場からのファールボール等により破れたガラスを交換する。

ii）盗難防止等のために、鉄格子を取り付ける。

③　以下の備品を設置する。

i）長いすベンチ８台（32人分）　→　ミーティング時に使用したり、荷物置き等として是非必要なものです。

ii）すのこ12枚（１枚１畳分）→雨天練習等のため、ドロやこまかい砂ぼこりの侵入は避け難く、床の汚れが目立つので、更衣用等として必要なものです。

iii）玄関用ブラシ・マット２枚→スパイクのドロ落とし用として備えたいものです。

2．仮設トレーニング・ルームの建設について

ウェイト・トレーニング用機器や、バーベル等は、現在、野球部の御好意により野球場スタンド下に置かせて頂き、ここで野球部と共用しております。しかしながら、この内部は暗く、混雑する場合もあり、昨年は鏡の前で素振り中の野球部員のバットが当部員に当たるという事故（幸い軽傷で済みましたが）も起こりました。

また、聞くところによりますと、スタンド改修工事が予定されている、とのことで、その期間中は機器を置く場所も無いのが現状であります。上の様な事情をおくみ取り頂きまして、地震研究所裏のサッカー部合宿所跡か、あるいは野球部スタンド裏のゴルフ部練習場付近に、下記の様な仮設トレーニング・ルームを建設していただきたく、お願い致す次第であります。

1)　寸法：10m×10m（現在の機器を置き、そこで安全にトレーニングするために、最低限このスペースが必要です。）

2)　仕様：

○基礎、及び床は相当重量に耐え得る頑丈なものとする。

○天井は最低限３mの高さをとるものとする。

○その他は通常の仕様で支障ないものと思われます。

3．照明灯の増設について

現在は照明灯が４基のため、暗く、プレーにさしつかえる地域があり、当部と致しましては、現状より少しでも明るくなることを願っており、グラウンド長辺の中央か、あるいはgoal裏に、対向して既存の物と同様な２基を増設することを要望致します。

4．その他、当部のみのためではなく、全学関係者のレクリエーションの場である農学部グラウンドの性格にかんがみまして、次の諸点について、改善をお願いする次第であり

ます。

1) グラウンド表層の衛生状態を検査し（破傷風菌や雑菌等の調査）その対策を実現する。（傷口が膿み、ひどいのは関節等にも膿みがたまり全治一ケ月にも及ぶケースがあります。）

2) お寺側のネット・フェンスの下部を金網のグラウンド側に張り直す。（現状ではネットと金網のスキ間よりボールが外に出、大変不便です。）

3) 金網を補修する。

4) シュート板を備えつける。または野球場側ゴール裏を整地する。

5) 物置の屋根の修理と現在の場所では不便なため、スポーツ・トラクター格納庫わきへの移動を要望致します。

6) ライン引き用のゴムが不明なので、これを埋め直す。

以　上

## 本郷記念館（仮称）建設に伴う要望書（再）

昭和62年３月６日

東京大学総長

森　　亘　殿

東大LB会会長

高　山　英　華

東京大学ア式蹴球部長

西　本　晃　二

東京大学ア式蹴球部は、東京大学創立百年記念事業の一環として、本郷記念館（仮称）を御殿下グラウンド地下に建設することが決定された際、昭和57年11月30日付で、別添のごとき要望書を提出いたしました。

以来、同グラウンドより埋蔵美術品の出土を見、考古学的調査の必要が生じたため、すでに４年余りが経過いたし、この間ホーム・グラウンドの使用が不可能のためア式蹴球部としては多大の不便を感じ続けてまいりました。この度、その考古学的調査も、やっと本年７月をもって終了、引続き記念館の建設に取り掛れる見通しとなったことは御同慶のいたりであります。

つきましては、この４年間、記念館完成後の御殿下グラウンド再使用に関するア式蹴球部の要望にはいささかの変化もございませんので、前回提出の要望書を改めて再提出いたし、我々の希望を叶えていただけるようお願い申し上げる次第であります。

附記：なお、聞くところによりますと、御殿下グラウンドに人工芝を敷設する可能性が検討されているということでございます。しかし人工芝については多くの医学・体育学上、維持管理上の難点が見越されており、ア式蹴球部としては敷設に多くの疑念を抱かざるを得ません。ここに御参考までにこれらの疑念も併せて提出し、慎重な御検討方をお願いいたす次第であります。

### 人工芝について

本郷記念館の完成後、その屋上を土をもって埋め戻し、再びグラウンドとすることは、すでに昭和57年に同記念館建築計画が固まった時点で決定をみているところであります。しかるに、このたび新たに、埋め戻しを行った上、グラウンド全体に人工芝を敷設する計

画があるやに聞いております。しかし、人工芝の利用においては、わが国に先んじた欧米諸国でも、近年は人工芝を廃して、天然グラウンドに戻すことが趨勢となっております。以下に人工芝グラウンドが持つ問題点を指摘して、十分慎重な検討方をお願い致す次第であります。

① 外傷（擦過傷ないしは火傷）の問題

人工芝を張った野球場でもスライディングを行うベース附近ではアンツーカーになっている。――サッカーではグラウンド全面でスライディングを行う。

撒水する――スプリンクラーの設置、秋半ばから早春にかけて使用不便。

土をいれる――ほこりの立つことは土のグラウンドと等しい。

② 内傷（足・腰などへの負担）の問題

既に医学的にも検証され、人工芝を天然グラウンドに戻す理由になっている。週４日、土・日曜試合を行うサッカー部員の健康におよぼす影響は甚大である。

③ 「照り返し」の問題

人工芝グラウンドは「照り返し」がはげしい。

夏期には40度を超す――スプリンクラーの設置――浅いお湯の中でプレイすることになる。

④ 維持管理の問題

タバコによる焼け焦げ

一般人の立ち入りを制限出来るか（病院の患者で軽度の人の散歩場となっていた）

犬・猫の糞や吸殻・ゴミなど（土の場合は吸収されるが、人工芝では残る）

早朝ゴルフなど――人工芝が部分的にきりとられる。（ハゲれば土のグラウンドよりみっともない）

⑤ 「張り替え」の問題

人工芝の耐用年限は６－７年と想定され、費用も一億を超すと思われる。（今回の敷設は百念記念事業で賄い得るかも知れぬが、第２回以後はどうするか）

以上のような諸点を考えると、人工芝の敷設には問題があるといわざるを得ません。土のグラウンドが景観上不適当である、あるいはほこりを立てるというのであれば、グラウンドに用いる砂の種類・色などに配慮し、かつ人工芝の場合にも設置せねばならぬスプリンクラーを適当に配置すれば、同様の効果を上げ、費用も（張り替え財源も含めて）ずっと少なく、かつ競技者の身体に与える悪影響もなくなります。

これらに加えて、北側のゴール・エリア附近の記念館ないしは貯水槽の屋上に載る部分と、それ以外の土の部分との接合点に、段差や急激な土質の変化を引き起こさないようにするという問題もあります。

こうした諸点を考えますと、本年７月から記念館工事が開始されたとして、工期20ケ月の予定であれば、十分検討の時間があると思われます。したがって、もし御殿下グラウンドに人工芝を敷設する可能性を考慮されるのであれば、性急に結論を出すことなく、この問題の関係者ならびに専門家をも含めた委員会ないしは作業グループを設けて、十分な審議を尽くされることを提案いたす次第であります。

# 本郷記念館（仮称）建設に伴う要望書（三）

## ――サッカー・グラウンドの農学部キャンパス移転に関する要望――

昭和62年５月15日

東京大学本郷記念館（仮称）に関する懇談会

座　長　　関　口　尚　志　殿

東京大学ア式蹴球部

部　長　　西　本　晃　二

監　督　　平　林　健　一

去る４月28日、５月８日の両日にわたって、東京大学本郷記念館（仮称）に関する懇談会（以下「懇談会」という）内に設置された御殿下グラウンド人工芝敷設問題についての「作業グループ」の会合が開かれ、実地調査も含めた討議が行われた結果、サッカー・グラウンドを農学部キャンパスに移転する可能性が大きく浮かんできたと承知しております。この事態を受けて、東京大学ア式蹴球部は部内において検討を重ね、以下のような要望を取りまとめましたので、ここに関係各位に提出し、十分なご配慮をお願いする次第であります。

記

① 東京大学ア式蹴球部は、創部以来70年余にわたり、一貫して御殿下グラウンドをホーム・グラウンドとして使用してきております。

このグラウンドを人工芝化することは、サッカー競技にとって適当でなく、常時、練習や試合に使用すると、脚に障害を起こしやすい心配があります。欧米ではプロの使用するグラウンドであっても、人工芝化にブレーキをかけつつあります。また、学生の公式試合が土または天然芝で行われているので、東京大学のみが、評価の定まらない人工芝を使用することは、適当でないと考えられます。

にも拘らず「懇談会」の強いご意向によって人工芝化が行われるとすれば、ア式蹴球部は御殿下グラウンドの使用を断念せざるを得ません。

故地を去ることは、先に「本郷記念館」建設候補地として七徳堂が擬せられた際に、武道５部がこぞって反対された例を見ても分かる通り、現部員のみならずOBの集まりである東京大学LB会にとっても情においてまことに忍び難いところであります。

「懇談会」におかれましても、この点に関する十分な配慮なしに、協議を進められる

ことのないよう強く要望いたします。

② 本郷記念館着工以前の御殿下グラウンドは、140m×68mの大きさを有し、従来正規のサッカー・グラウンドとしては、幅がやや狭少でしたが、今回、本郷記念館建設にともなう改修にさいして、幅75mを確保するということで合意ができております。(昭和57年11月、本郷記念館建設計画決定時)

それが、このたび改めて農学部キャンパスに移転するというのであれば、グラウンド面積は、正規のグラウンド105m×68mに加え、縦に5m(うち2.5〜3mはゴールポストの奥行き)づつの余裕、幅に3.5mづつの余裕を見て、115m×75mの広さが最低限確保されることが、絶対に必要であります。(別添資料1参照)

同時に、同じ別添資料1に記載された、側溝の移転などを含む、グラウンドの全面改修もしていただけるよう強く要望いたします。

またア式蹴球部の部室についても、先に本郷記念館建設計画において合意された通り5.15m×39.65m=204.19㎡(本郷記念館建設にともなう要望書−1、昭和57年11月30日付け参照)を下回らぬ広さを有し、別添資料2に掲げられた諸設備を備えた建物を、農学部グラウンド西北隅に隣接した位置に建設することが絶対に必要であります。

加うるに、同じく別添資料2に記載されたシュート板、照明、その他の設備についても、これを設置していただけるよう、強く要望いたします。

③ 本郷記念館の建設計画は、昭和57年に決定を見、翌58年7月より20ケ月の工期予定をもって工事が開始されました。(この時の計画では建物完成後は屋上を土を以て埋め戻しサッカー・グラウンドとして再使用することが当事者間で合意されており、この前提にたってア式蹴球部が工事期間中、他のグラウンドに移ることを了承したのは、ご承知の通りであります)。

しかるに、土木工事開始直後より、埋蔵文化財の出土を見、一時工事を中断、考古学的調査を行うこととなり、現在にいたっております。同調査は来たる7月をもって終了、8月より建設を再開して20ケ月を経て、記念館完成という日程と承知しております。この間、不測の事態の出現によるとはいいながら当初のグラウンド使用不能期間約2年間が、昭和62年5月現在ですでに4年弱、建物完成時までを加算すれば、実に6ケ年余りの長きにわたってア式蹴球部はホーム・グラウンドを奪われた不便な状態を強いられている有様であります。

この劣悪な状況から一日も早く脱出したいという希いが、現役・OBを駆って今回の

グラウンド移転に踏み切らせた要因のひとつであります。もしも農学部キャンパスに恒常的使用のためのグラウンドを確保するのであれば、その設備には、本郷記念館の完成を待つ必要は毛頭ありません。一日も早くグラウンド拡張・改修、部室建設工事に取り掛かっていただけるよう強く要望いたします。

④ 当然予測されることでありますが、農学部グラウンドの拡張工事にも、予算措置、既存構築物の移転などの問題が付随してくると思われます。これらの問題の解決は、前記②の実現に必須であり、その取り扱いが判然せぬまま、徒らに時を費して、かえって時機を失することがあってはならないと考えます。もしも一定期間の検討を経て、問題解決のメドが立たないようであれば、人工芝化に固執せず、当初の計画通り本郷記念館屋上を土をもって埋め戻し、従前の形式のグラウンドとして使用することが妥当であると考えます。(昭和62年3月6日付け、サッカー部要望書－2参照)

いずれにしてもア式蹴球部といたしましては、グラウンド問題の解決が本郷記念館完成時より遅れることがあっては絶対にならないと考えておりますので、この点についての、ご高配をも強く要望するものであります。

以　上

別 添 資 料－1

## 農学部グラウンド拡張、及び全面改修について

1) 次図－1の緑線部分を、高さ10mのネットフェンス（ボール飛び出し防止用）とし、その内側が全てグラウンドとなるように、拡張する。

図中①の野球場側は、危険薬品庫を適当な場所に移転し、イチョウの大木まで土手を削り、グラウンドを8m拡張する。

②の寺側は、法尻まで3.25m拡張し、小道はイチョウの木々とコンクリート塀の間を通す。

③の農芸化学科の前は、建物から3mの所まで拡張し、そこにフェンスを張る。

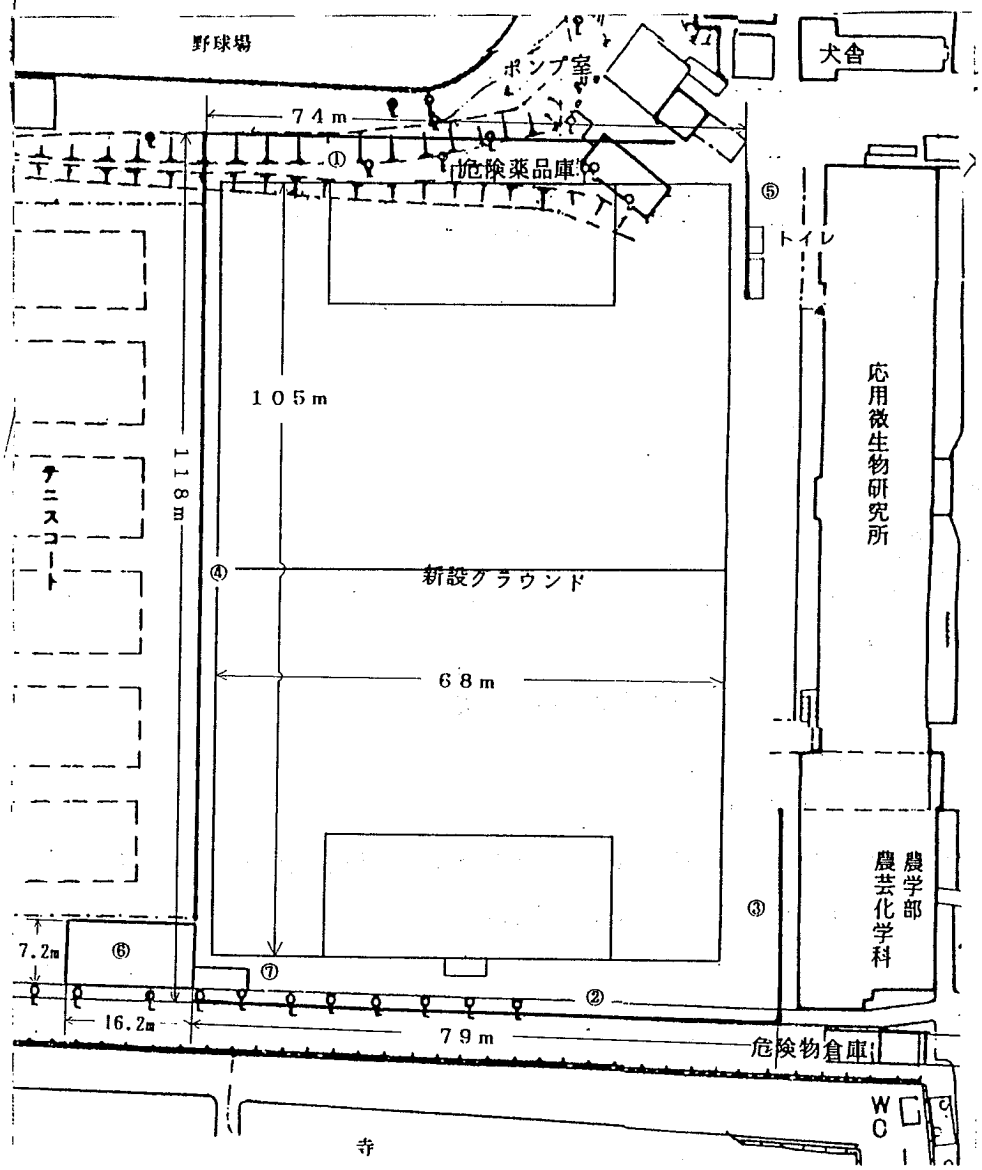
④のテニスコートとの境界線、⑤のトイレ脇のフェンスは、現状の位置で良い。

2) 全面改修

i．現在の側溝を除去して全面掘り返し、水はけが良く軟らかい良質の土に入れ替え、整地し平坦なグラウンドとする。

ii．同時に、散水・排水設備を整備し、側溝は新たに設置するフェンスに内接して通す。

図－1　農学部グラウンド拡張計画図



別 添 資 料－2

## 部室及び諸設備等について

1) 部室（50名の使用が前提）

別添資料－1の図中⑥の位置に、次図－2のような、面積と基本的構造・設備を有する部室を建築する。

2) 諸設備（昭和60年12月19日付サッカー部要望書参照）

i．対戦チーム等用控室、兼トレーニングルーム

現在のテニス部室脇の仮部室を、床を補強して一般学生・教職員、あるいは対戦チーム用控室、トレーニングルーム（バーベル等を置く）として使用する。

ii．シュート板

応微研前に5m×15mのシュート板を設置するか、野球場側フェンスの下部3mをコンクリート塀のシュート板とする。

iii．照明灯の増設

iv．器具庫

別添資料－1の図中⑦の位置に、器具庫（ボール、石灰、ラインカー、レーキ等収納用）を置く。

v．ペンデル柱（ヘディング等練習用）の増設

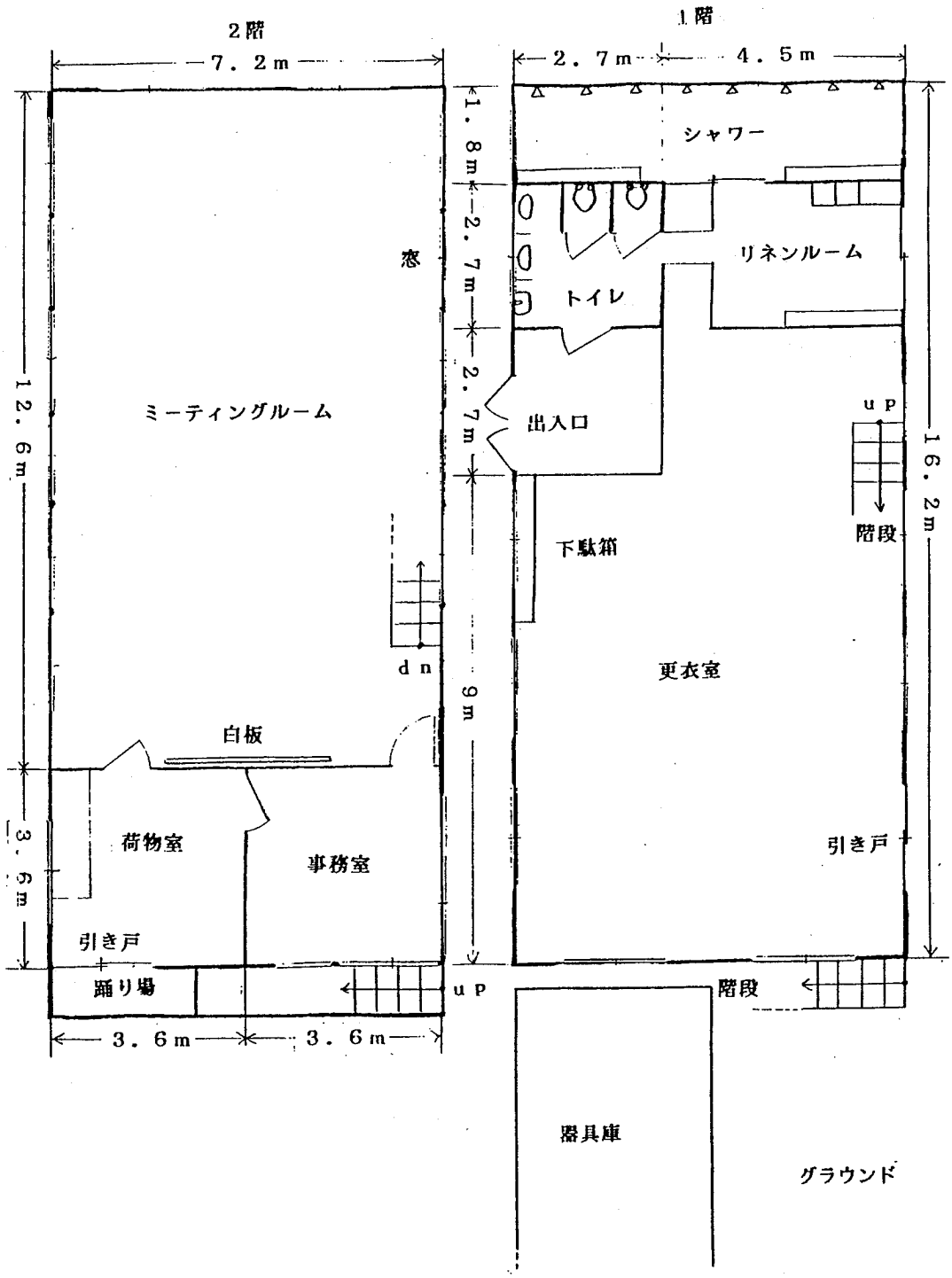
vi．得点掲示板

3) グラウンド使用時間

原則としてグラウンドは、以下の時間を当部が優先的に使用のこととする。

平日：14時以後、土・日・祭日：12時以後

## 図－2　部室見取図　縮尺＝1：100



# 要　望　書

昭和63年6月7日

小林学生部長　殿

東京大学ア式蹴球部長

西　本　晃　二

農学部グラウンド整備について

東京大学ア式蹴球部は、東京大学創立百年記念事業委員会ならびに東京大学の決定に従い、ホーム・グラウンドを御殿下グラウンドより農学部グラウンドに移転いたしました。その際(一)移転先の農学部グラウンドを正規の大きさ（縦115m、横73m）に拡張し、夜間照明、シュート板その他の附帯設備を充実していただく。(二)部室を新ホーム・グラウンドに隣接して建設していただく。以上2点の条件を提示し、事業委員会ならびに大学の合意を得ております。

グラウンドに関しては、先月5月9日をもって造成を終り、当部の希望通りの拡張、附帯設備を行っていただき有難く存じております。ただしグラウンドの表面につきましては、入れた土が小石を多量に含んでおり、かつ土質がグラウンド向きのものでないため、雨が降るとぬかるむのみならず、全体としては水捌けは好いのに、水が引いた後凹凸のはげしい形に固ってしまい、プレーに適当ではありません。この点について至急処置をお願いいたす次第であります。

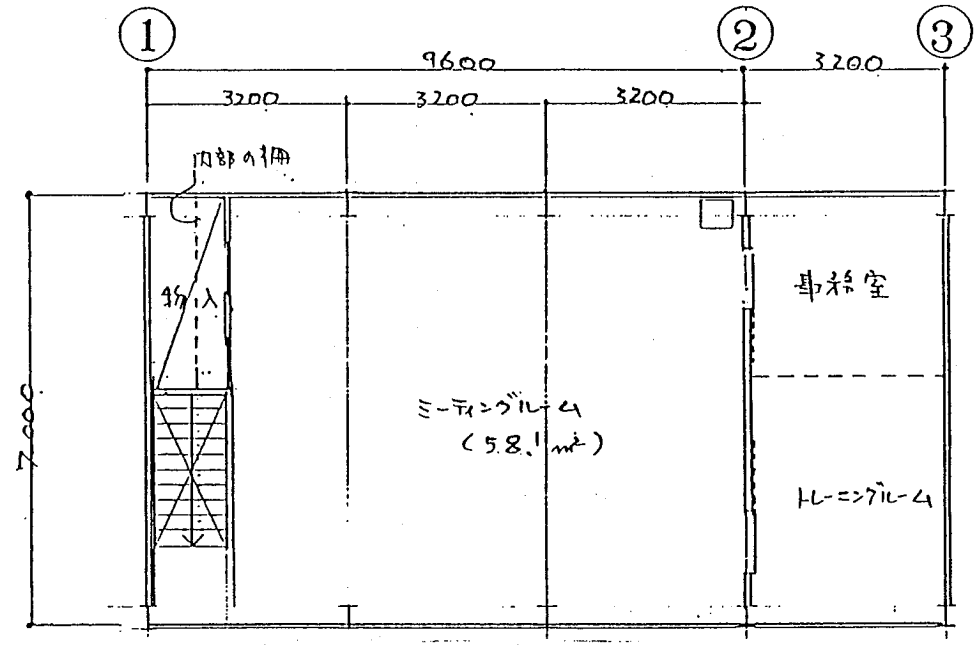
部室につきましては、対外試合、OBとの交流にも差支えますので、出来るだけ早く建設にかかっていただきたいことと、設計の際に当部の意向を十分お汲みいただけるよう御高配をいただけますよう、取り敢えずお願いいたす次第であります。

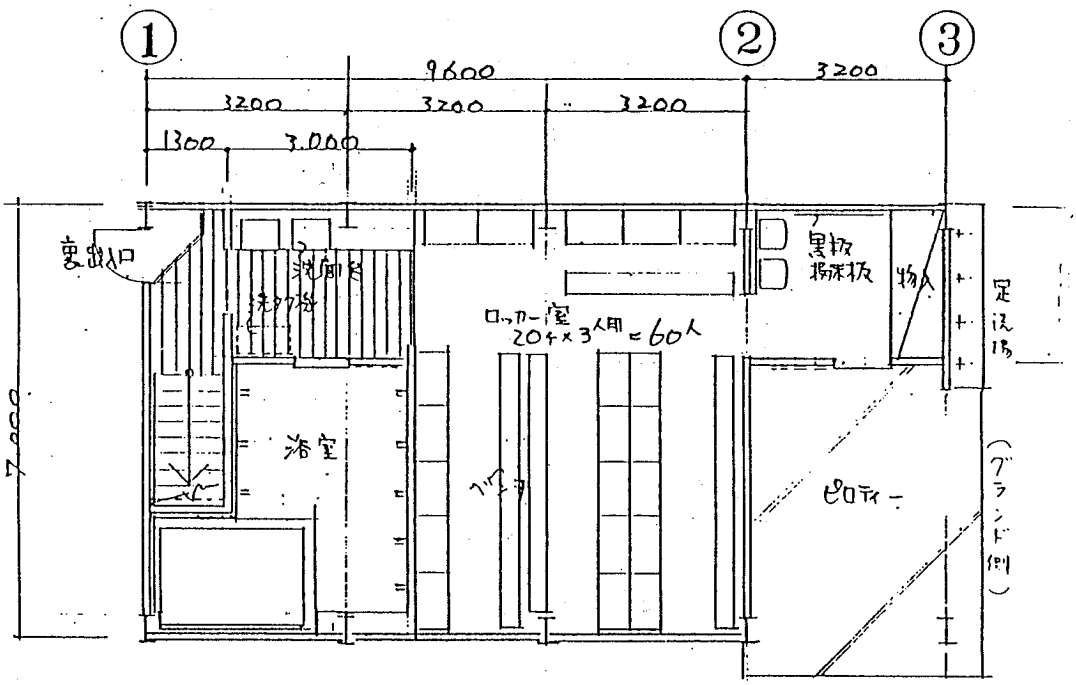
以　上

新　部　室　案・図　面

昭和44年卒、永峰富一氏に設計・製図して頂き、

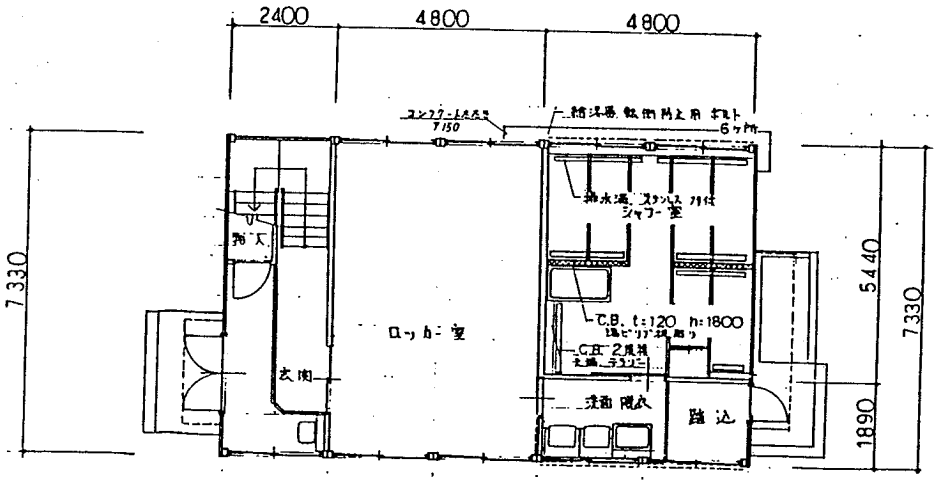
昭和63年９月13日に大学側に提出したものです。



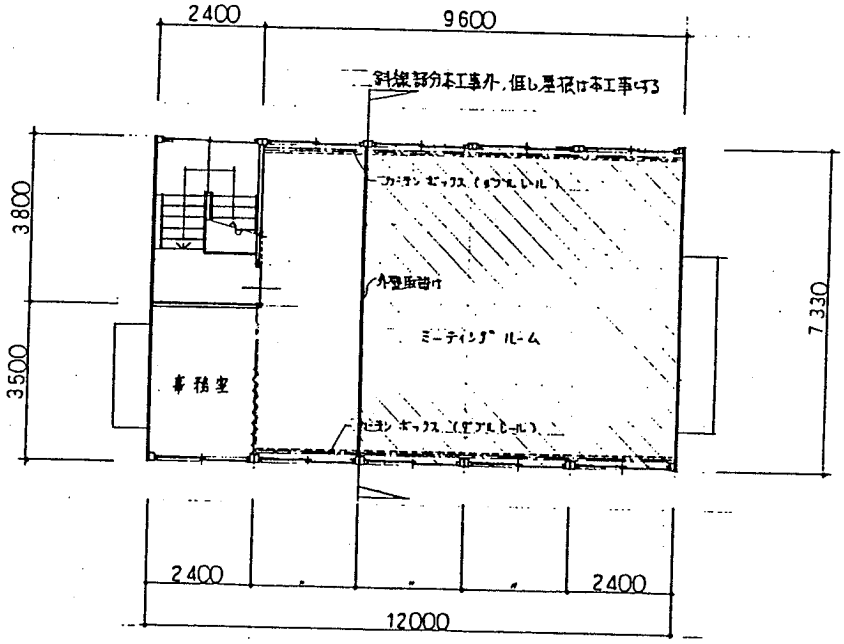



## 東京大学サッカー部・部室

1階・2階平面図（東京大学施設部・昭和63年12月）

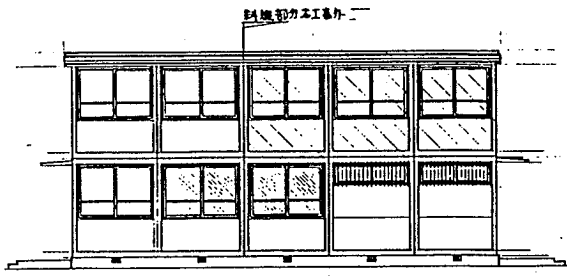



1 階 平 面 図

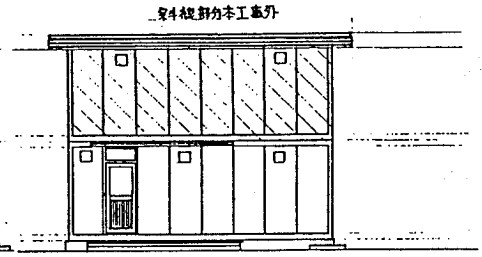



2 階 平 面 図

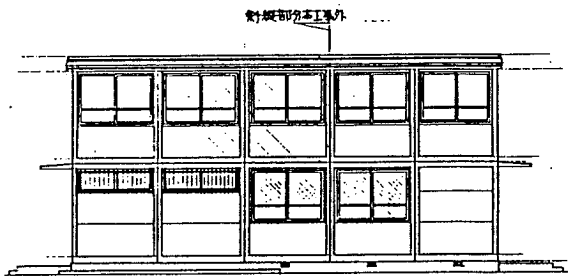
## 立面図・断面図



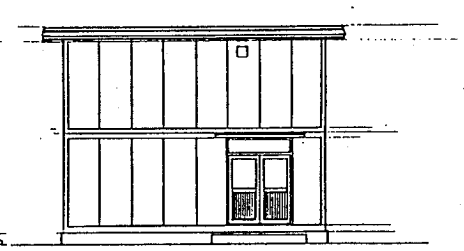

X0 立面図



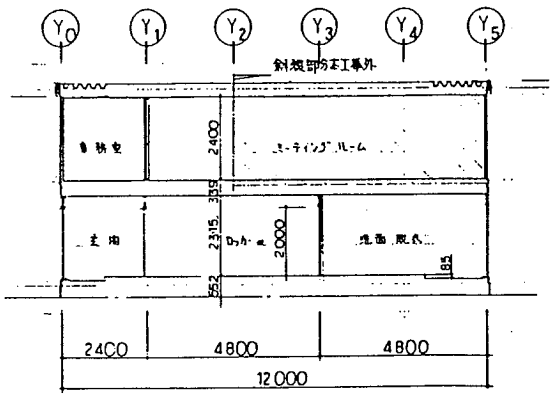

Y5 立面図



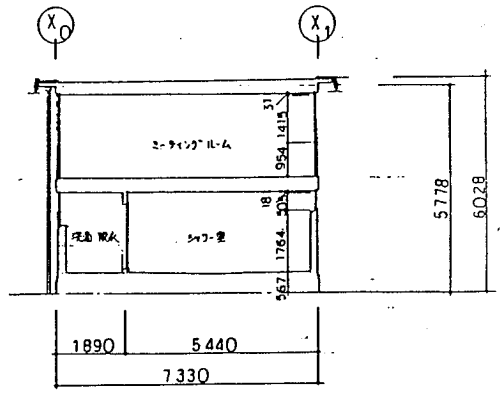

X1 立面図



Y0 立面図




断面図




断面図

# 募 金 趣 意 書

謹啓　入梅の侯、LB会員諸兄には、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

扨、本日御案内を差上げますのは、東京大学ア式蹴球部部室建設計画についてでございます。すでにここ数年来、年次報告その他で再三お知らせ致しておりますので、諸兄には十分御承知のことと存じますが、昭和57年秋に東京大学創立百年記念事業の一環として、御殿下グラウンド地下に体育館を建設することがまず決定を見、つづいて昭和62年秋には、体育館完成後その屋上を埋め戻して、グラウンドを再使用するに当って、表面を人工芝化するということが大学の方針として打ち出され、目下その線に沿って工事が進行中であります。

これら一連の動きの過程で、ア式蹴球部としては、部創設以来70年の活動の本拠地をなんとか保全すべく、関係方面にさまざまな働きかけを行ってまいりました。しかし大学側からは、「なにぶん用地不足のため、ア式蹴球部の苦境は十分理解するが、人工芝化だけは枉げて承認してもらいたい」旨、たっての申し入れがありました。しかし、多くの実例に示されるとおり、人工芝のグラウンドでは急性（擦過傷）及び慢性の怪我（膝・腰の障害）が多発しており、サッカーには不適当であります。そこでLB会役員、現役首脳が会合を重ね慎重審議を行った結果、「煮え湯を呑んで」「清水の舞台から飛降りる」ような気持で、農学部運動場にホーム・グラウンドを移す決定を致しました（資料１）。これと同時に、

1．グラウンドに関しては、（応用微生物研究所、地震研究所の建設によって正規のグラウンドの面積を欠くにいたった）農学部運動場を縦115m、横73mの長さを有するものに拡張する。

2．新グラウンドに隣接してあらたに部室（別紙完成予想図参照）を建設する。

以上の２点を大学側に申し入れ、同意を得ました。

そしてその結果として、第１点については、校費により、当部の要求通りの大きさを有するグラウンドが、シュート板、夜間照明施設、散水設備とともに去る５月９日をもって造成工事を終り、「五月祭」当日の５月28日には、恒例の「五月祭OB戦」を兼ね、OB50余名の御参集を得て、グラウンド開きを盛大に行いました。

一方、この趣意書の本題であります「新部室」に関しましては、

1．部室総面積、140㎡（ただしトイレは含まない。トイレは当部専用ではなく、大学施設

として部室に隣接して建てる)。

2．その㎡単位は10万円とする。

ということで、「百年記念事業委員会」より1,400万円の建設費を獲得いたしました。しかしこの面積、金額についても十分とはいえず、別紙の資料2に示すとおり、この予算では部室としての必要最低限の機能をそなえることすらできません。

当部も、その旨の申し入れを再三行ったのでありますが、「百年記念事業委員会」においても、当初100億の募金目標が40億に満たなかったこと、かつ大学としては近年の慣行より、単独部の部室建設単価および面積がこの程度であり、またグラウンドに隣接して部室を建設し得る敷地がかなり手狭であること等の理由で、百年記念事業委員会からの支給金額については、最終的には合意せざるを得ませんでした。

しかし今回の部室建設は、

1．基本となる資金が大学の校費ではなくて百年記念事業の寄附金であるため、他からの寄附金との合体によく馴染む。

2．部室の総面積は基本的には140㎡という線だが、まだ検討の余地がある。

以上の二つの理由により、我々が自助努力をすることによって部室にかなりの質の向上を期待することが可能であります。

例えば資料3に示すような、

① ミーティングルーム拡張

② シャワー増設

③ トレーニングルーム拡張

等々によって、部室の居住性を増すことにより、納会や五月祭のOB戦におこしくださるOBの方々に御不便をおかけしないでサッカーを楽しんで頂くことができます。

また、夜間照明施設の有効利用によって、LB会員の方々に、休日のみならず、お仕事が早く終られた週日にもグラウンドにおこしいただき一汗流していただくことができるようになり、これを現役との交流、東大LBの復活、ひいては東大サッカー全体の振興につながるように持って行きたいというのが我々の希いであります。さらには、内部設備の充実により、先年取壊された合宿所の持っていた機能を部分的に取戻し、OBの皆様との連絡を含めた部活動の強力な拠点を持つことができます。

部室の新築という千載一遇の機会に当り、後に悔いを残さぬよう、出来るだけ良いものを造り、現役もOBも十分これを活用するという趣旨で、百年記念事業団よりの1,400万円

に対し、1,000万円を募金目標として、合計2,400万円をもって充実した新しい部室を建設したいというのが今回の募金呼びかけの内容でございます。

なにとぞ発起人一同の意のあるところをお汲み頂き、恐縮でございますが、一口金1万円の御寄附を最低三口、郵便為替（同封の用紙をお使い下さい）または銀行振込により、下記の口座まで8月27日迄にお寄せいただけますよう、伏してお願い申し上げる次第です。

敬　具

昭和63年6月29日

LB会会員各位

東京大学ア式蹴球部部室建設募金委員会発起人一同

（発起人名簿は次頁を御参照下さい。）

記

振込先

郵便為替：東京０－６０３７１
東京大学ア式蹴球部

銀行振込：三和銀行　本郷支店　普通預金口座３５０７０１４
東京大学ア式蹴球部　代表　須賀敏孝

連絡先：平　林　健　一（昭和55年卒）　電話　03-815-8907
吉　澤　伸　明（昭和50年卒）　電話　0422-42-0288（自宅）
03-242-4111　内線5761
03-275-7532（直通）

◎領収証がご入用の方は同封の葉書にてお知らせ下さい。

◎また本年度はLB会会員名簿を兼ねた雑誌「闘魂」作成のため、掲載広告の募集を予定しております。御協力頂ける方は後日詳しい資料をお送り致しますので、その旨を同封の葉書にお書き添え頂ければ幸甚に存じます。

◎また事前に前記連絡先までご連絡頂ければ、学生が直接御寄付を頂戴に伺いますのでよろしくお願い申し上げます。

発起人（卒業年度順）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 会　長 | 高山英華 | （LB会長）（昭和９年卒） | | |
| | 有馬　洪 | （昭和16年卒） | | |
| | 天野公義 | （昭和17年卒） | | |
| 副会長 | 須賀敏孝 | （昭和19年卒） | 小川恭二 | （昭和43年卒） |
| | 高月東一 | （昭和20年卒） | 八林秀一 | （昭和44年卒） |
| | 渡辺洋三 | （昭和22年卒） | 吉崎英雄 | （昭和45年卒） |
| | 馬渡一真 | （昭和24年卒） | 渡辺　宏 | （昭和46年卒） |
| | 海老原　純 | （昭和25年卒） | 手島直幸 | （昭和47年卒） |
| | 石川晴樹 | （昭和27年卒） | 佐々木順孝 | （昭和49年卒） |
| | 海老原　朗 | （昭和28年卒） | 吉澤伸明 | （昭和50年卒） |
| | 原　忠彦 | （昭和29年卒） | 池森俊文 | （昭和51年卒） |
| | 藤本鉄也 | （昭和30年卒） | 三島　茂 | （昭和52年卒） |
| | 折原一雄 | （昭和31年卒） | 青山研一郎 | （昭和53年卒） |
| | 原　靖二郎 | （昭和32年卒） | 吉江建一 | （昭和54年卒） |
| | 小林昭夫 | （昭和33年卒） | 佐藤敦郎 | （昭和55年卒） |
| | 高田宗昌 | （昭和34年卒） | 松元明弘 | （昭和56年卒） |
| | 小山冨士夫 | （昭和35年卒） | 飯島　敦 | （昭和57年卒） |
| | 高場真平 | （昭和36年卒） | 和田康太郎 | （昭和58年卒） |
| | 斎藤次郎 | （昭和37年卒） | 柴田　周 | （昭和59年卒） |
| | 中村紀雄 | （昭和38年卒） | 伊藤　洋 | （昭和60年卒） |
| | 安達二郎 | （昭和39年卒） | 小泉泰郎 | （昭和61年卒） |
| | 石光　豊 | （昭和40年卒） | 鈴木修二 | （昭和62年卒） |
| | 河島洋征 | （昭和41年卒） | 鹿園直毅 | （昭和63年卒） |
| | 吉田茂男 | （昭和42年卒） | | |

## 部室建設募金委員会の委員の皆様へのお願い

去る6月15日ホテルニュー神田における部室建設委員会初会合には、多数ご出席の上、予定を1時間上回る熱心な御討議を頂きました。部室建設案に対する様々な貴重な御意見、アイデアの交換の後、満場一致で部室建設募金の実施と、募金目標を1,000万円とすることが決議されました。また、実行計画については、実行委員が指名され、その実行委員会に一任されました。

その後、実行委員会では、討議を重ねた結果、以下の様な実行計画を立案し、部室建設委員会正副委員長の御承認を得ました。募金委員の皆様方には、この実行計画を御理解頂いた上で、目標が達成できますよう、御協力をお願い申し上げます。

募金実行計画

1．募金目標額　　1,000万円

2．募金参加対象　　LB会員：総数359名

ただし、名誉会員である昭和15年以前のOB諸氏72名は除外してあります。

3．一人当り募金額　3万円

この金額の根拠は次の通りです。

1)　LB会員総数（359名）で募金目標額を割った単純平均は、27,855円になります。

2)　昨年度のLB会費納入率は72%でしたが今回の募金については趣旨を各会員に十分理解していただき、ほぼ全員の賛同を得ることが可能と考えました。（95%の参画率で1,000万円は達成できる）ちなみに昨年駒場に部室を建設したラグビー部の例では、一人最低3万円の募金目標をほぼ全員の参加で達成しています。

4．目標期限

第1次締切：8月27日

8月末に一度募金状況をみて、最終目標までの実行計画を見直します。

最終期限　：10月29日

趣意書にもありますように、大学当局との交渉は今秋に終了し、来春までに完工させるためには、10月末までに本募金計画を終了させることが必

要と思われます。

5．募金振込の方法

本募金用の特別口座を三和銀行本郷支店に開設しました。郵便振替の口座は既設のものを利用します。ただし郵便振替の用紙は特別なものを用意し、LB会年会費と混同しないように致します。

6．領収書の発行

ご希望に応じて領収書を発行します。

7．募金の促進

LB会費1万円に加え、今回募金の3万円は決して容易に集まるものではないと考えられますので、各委員が中核となって、同年次のチームメートに募金の趣旨の説明を十分に行い、全員の賛同が得られるよう活動していただくことが不可欠となります。

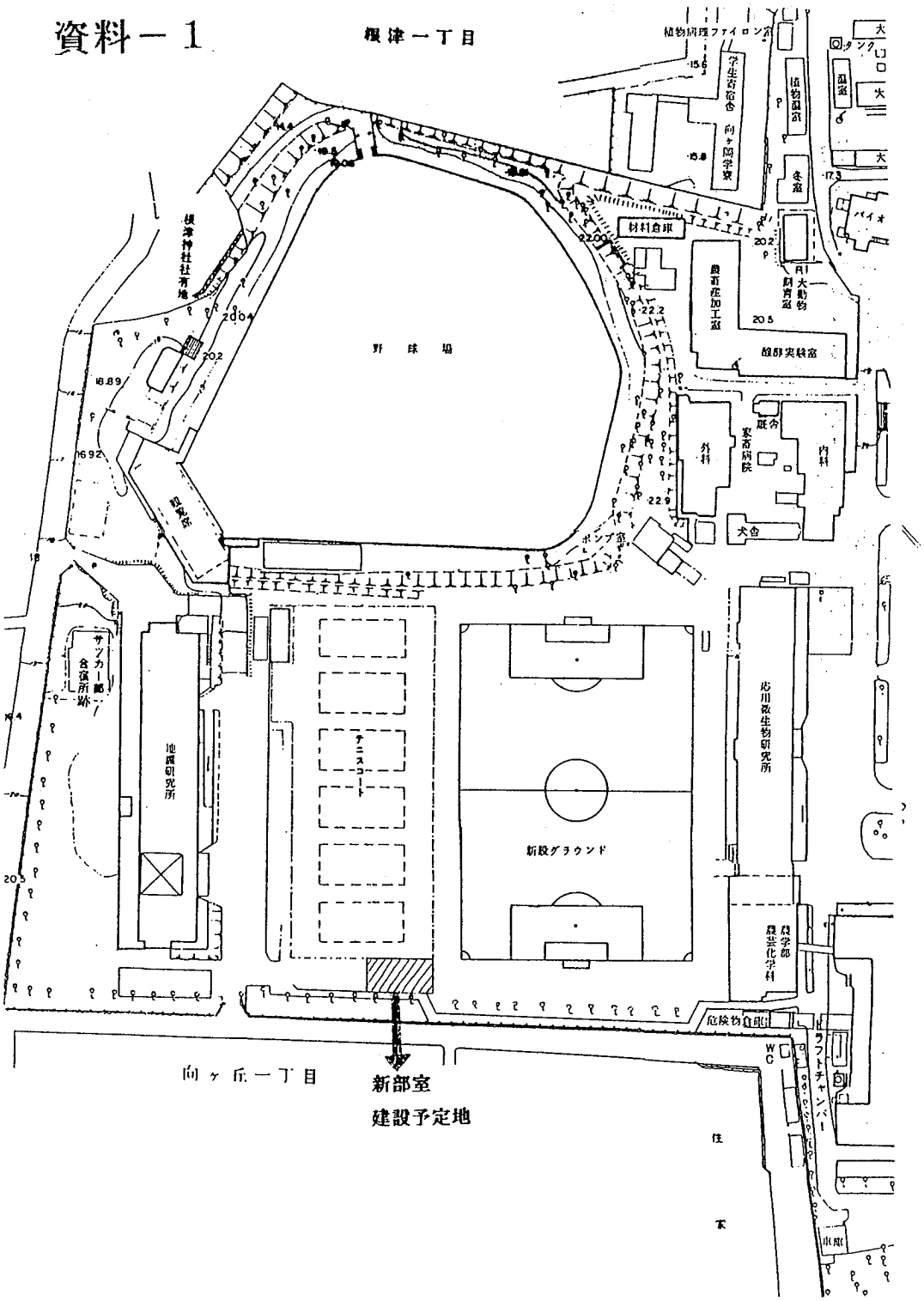
お手持ちの会員名簿で各年次の方々のご連絡先を確認頂けると思いますが、念のため、貴兄と同年次の方々の名簿を同封致します。

昭和63年6月29日

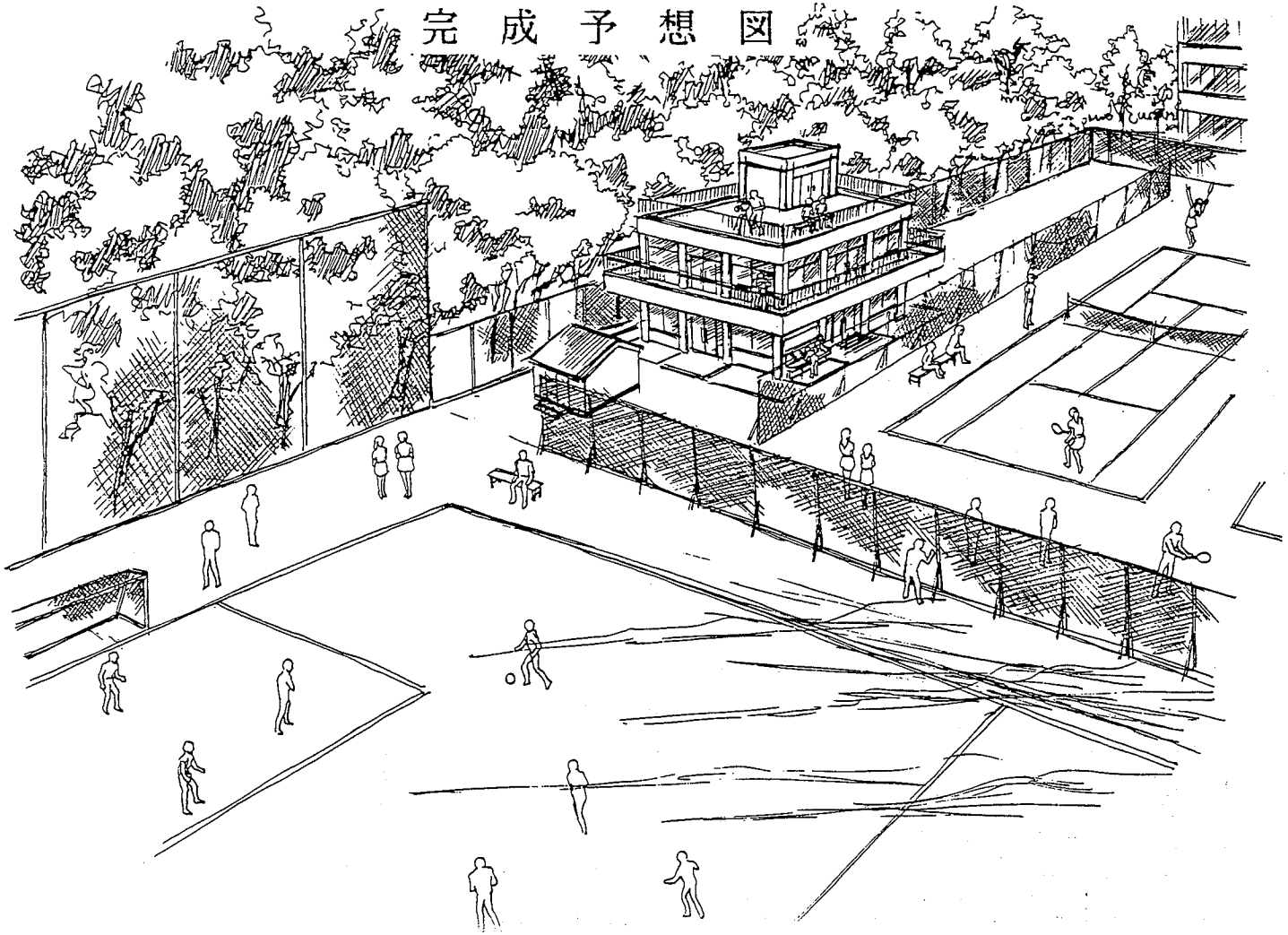
部室建設募金実行委員会

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 岡　野　俊一郎 | （昭和31年卒） |
| 委　員 | 西　本　晃　二 | （昭和31年卒） |
| | 手　島　直　幸 | （昭和47年卒） |
| | 吉　澤　伸　明 | （昭和50年卒） |
| | 平　林　健　一 | （昭和55年卒） |
| | 和　田　康太郎 | （昭和58年卒） |

# 資料－1

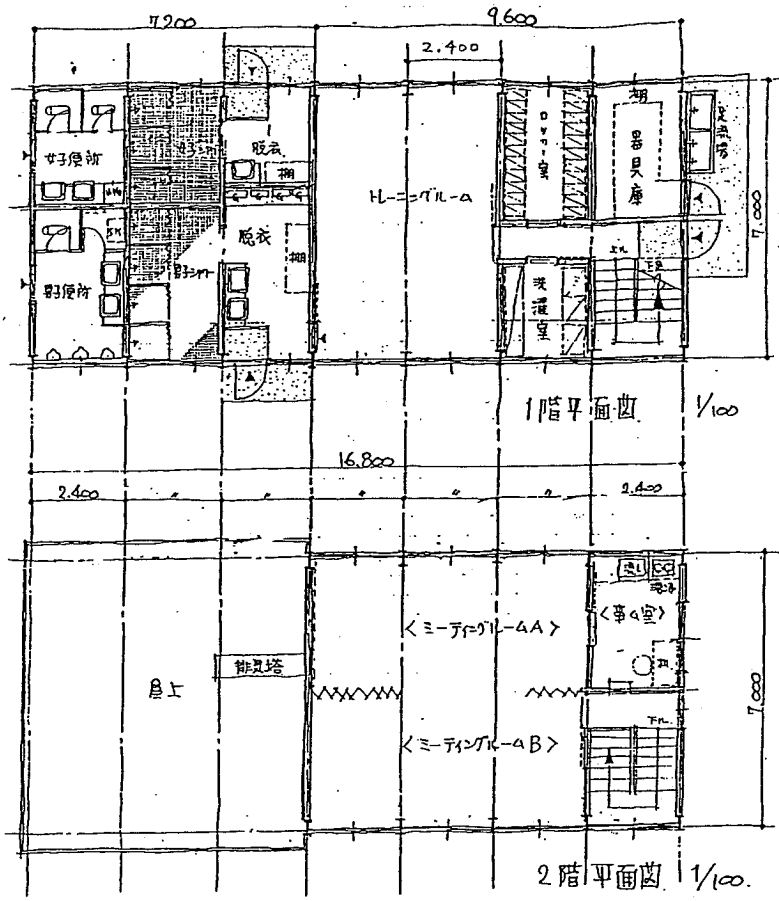

根津一丁目
植物病理ファイロン室
学生寄宿舎
向ヶ岡学寮
植物温室
温室
冬室
材料倉庫
根津神社社有地
野球場
農産物加工室
大動物飼育室
醗酵実験室
外科
家畜病院
内科
厩舎
大舎
ポンプ室
サッカー部合宿所跡
地震研究所
テニスコート
新設グラウンド
応用微生物研究所
農学部農芸化学科
危険物倉庫
WC
ラフトチャンバー
出張
向ヶ丘一丁目
新部室
建設予定地

# 完成予想図



# 資料－2　「施設部による部室案」

鉄骨プレハブ　平方米単価：１０万円　総工費：約１４００万円




主な問題点

○ミーティング・ルーム：
５０人が全員でミーティングすることは、不可能

○トレーニング・ルーム：
この面積ではベンチプレス、スクワット、腹筋を同時に３，４人が行なうことしかできない
多人数で行なうことは、危険

○ ロッカー室：
５０人用としては狭すぎる

○ シャワー室：
浴槽が無い。
シャワー４基では不足

面積表

| | | | |
|---|---|---|---|
| 部室 | 1階 | 67.2 m² | サッカー部専用 |
| | 2階 | 67.2 m² | |
| | 計 | 134.4 m² | ※注・御殿下グラウンド地下の旧部室が、約１４０㎡であったことから、約１４０㎡と大学側は見積もった |
| 便所・シャワー室 | | 50.4 m² | ※注・便所・シャワー室は、大学案ではサッカー部専用ではないため、女子用も備わっている |
| 合計 | | 184.8 m² | |

資料―３

募金１千万円により付加されるべき機能・施設（案）

| | 概算見積 |
|---|---|
| １．ミーティング・ルーム拡張（＋３０㎡）<br>①ビデオ教材使用の戦略研究<br>②ＯＢ談話室としての利用<br>③新入生合宿としての利用可<br>等、多目的に利用 | ３００万円 |
| ２．トレーニング・ルーム拡張（＋２０㎡）<br>全体で１０人程度が同時使用できる<br>ようになる | ２００万円 |
| ３．シャワー及び風呂場拡充<br>部員５０人用としてシャワー４基増設<br>（計８基）は是非必要<br>さらに風呂を設置 | ３５０万円 |
| ４．更衣室、便所拡充<br>２５人分のスペース拡充して、部員５０人が<br>更衣出来るようにする<br>男子便所１基増設 | ５０万円 |
| ５．備品整備、その他<br>電話、ワープロ、ビデオ設備、家具<br>等 | １００万円 |

合計　１，０００万円

63年10月20日

LB会会員各位

東京大学ア式蹴球部　部室建設募金委員会発起人一同

部室建設募金の御礼・及び再度のお願い

謹啓　仲秋の候、OB諸兄には、益々ご清栄の事とお慶び申し上げます。

この度は東大ア式蹴球部室建設のための募金にご協力を頂き、発起人一同まことに有難く存じております。同募金は目標額を1,000万円、期限を10月末と設定いたし、目下鋭意募金活動を行っておりますが、同封の10月12日付募金状況（資料－1参照）をご覧いただけばお判りの通り、現在までの募金総額692万1千円、応募者数178人となっておりまして、目標額には未だ3百万円余の不足、またLB会員441人に対して応募者の占める割合は40%ということになっております。

今回のホーム・グラウンド移転に伴う新部室建設は、先般お送り致しました「募金趣意書」にもございます様に、まさに「千載一遇の機会」と存じます。この機を逃さず、未来に向けて、グラウンドと共に東大サッカーの中心的拠点となるべき部室を、後の悔いを残さぬような形で建設したいというのが、我々発起人一同の考えであります。

部室の建設に関しては、大学当局との厳しい折衝を経て、当初こちらの面積185㎡（御殿下グラウンド地下旧部室相当）という要求に対し、一時は130㎡以上は認められないという回答をはね返し、ともかくも176㎡の面積を獲得する所までこぎつけております（資料－2参照）。工期については11月下旬には着工、明年2月末には完成予定（御殿下グラウンド地下体育館完成と同時期）、明年5月祭にはOB戦を兼ねて新部室をご披露いたすことができると存じます。

この176㎡の建設費として、東京大学百年記念事業委員会が支出に合意した1,400万円では、1㎡当り単価が10万円にも達せず、絶対的に不足しているのは明々白々であります。よってLB会として1,000万円の募金を計画したわけですが、予算表（資料－3参照）をご覧いただければお判りの通り、この予算は建築総工費約2,100万円、備品費約300万円となっており、現状では、備品（ロッカー、机等；資料－4参照）分が不足している状態であります。現在いっぽうでは建築費を圧縮するよう、大学施設部と話し合いを続けておりますが、単価の切り下げが建物の質の低下につながることだけは絶対に避けねばならぬこともあって、交渉は楽観を許しません。他方、募金目標を達成できないとあっては、大学

当局あるいは百年記念事業委員会より、LB会の部室建設に対する取組みに関して、きわめて不本意な評価を受けることにもつながりかねません。

従いまして、10月20日現在未だご応募いただいておらぬOB諸兄に対し、「期限もきていないのに、なにを慌ただしく」とお叱りを頂戴するのは承知の上で、失礼をも顧みず再度募金のお願いを致すものであります。期限につきましても下記の通りこれを12月31日まで延長し、弾力的な募金活動を行うことに決定いたしましたので、なにとぞよろしくお願い申し上げます。なにとぞ発起人一同の意のあるところをご賢察いただきまして、ご多用中のところ真に恐縮でございますが、下記の要領にて、早めにお振込みいただけますよう、重ねてお願い申し上げる次第でございます。　　敬具

記

金　額：１口　金１万円　最低３口　　締　切：12月31日（土）

振込先：郵便振替・東京０－６０３７１

東京大学ア式蹴球部（同封の用紙をお使い下さい）

銀行振替・口座名は全て　「東京大学ア式蹴球部　代表　須賀　敏孝」です。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 三和銀行 | 本郷支店 | （店番３５１） | 普通預金口座 | ３５０７０１４ |
| 第一勧銀 | 本郷支店 | （０７５） | 〃 | １０１５４９６ |
| 富士銀行 | 本郷支店 | （２３２） | 〃 | １６１３０８４ |
| 三菱銀行 | 吉祥寺支店 | （２２０） | 〃 | ０３９１３３５ |
| 住友銀行 | 吉祥寺支店 | （３０９） | 〃 | １５６０８８１ |

※お願い

① 領収証について：大変遅くなり、誠に申し訳ないのですが、現在までにご寄附頂いた皆様には10月末で一旦締めさせて頂き、11月中に領収証をお送り致しますので、ご了承の程よろしくお願い致します。

② 備品について　：資料－４に掲げました備品リストの中で、ご寄附頂ける品物がございましたら、誠に恐縮ですが下記にご連絡頂ければ幸いと存じます。

連絡先：平　林　健　一（昭和55年卒）　電話　03-815-8907

吉　澤　伸　明（昭和50年卒）　電話　0422-42-0288（自宅）

03-275-7532（勤・直通）

63年10月22日

部室建設募金委員会発起人各位

部室建設募金実行委員会

## 部室建設募金委員会発起人の皆様へのお願い

拝啓　仲秋の候　部室建設募金委員会発起人の皆様には、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

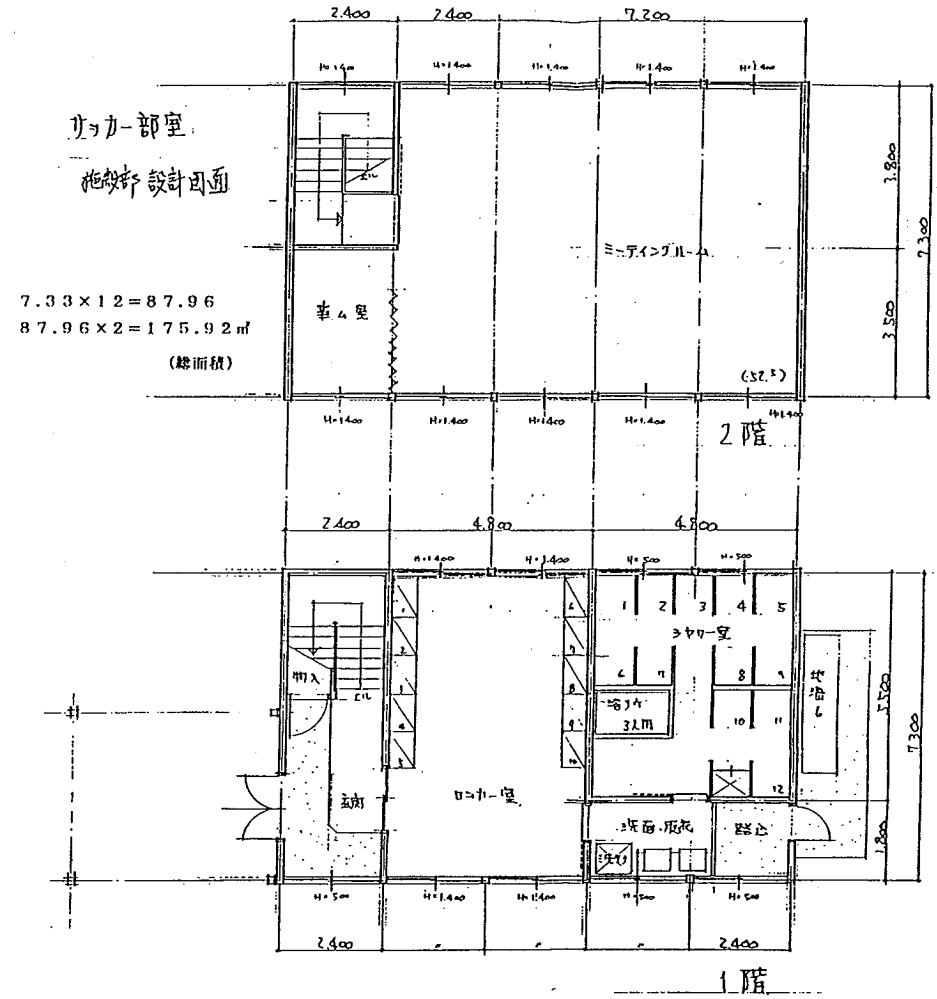
さて、発起人の皆様のご尽力によりまして、新部室建設のための募金は、10月21日現在、178名、合計692万１千円に達し、募金目標の1,000万円にあと300万円余りという所まで来ております。また、部室建設準備につきましては、大学当局との厳しい折衝を経て、なんとか総面積176㎡を獲得いたしました。ところが、資料－３、４をご覧頂けばお判りの通り、総予算は、建築費2,100万円、備品費300万円となっておりまして、東大創立百年記念事業団からの1,400万円と、現在までの募金700万円をあわせた2,100万円では、備品費が不足している状態であります。募金目標を達成し、充実した新部室にするためには、さらに多くの方々のご賛同を得ることが不可欠の状態と思われます。

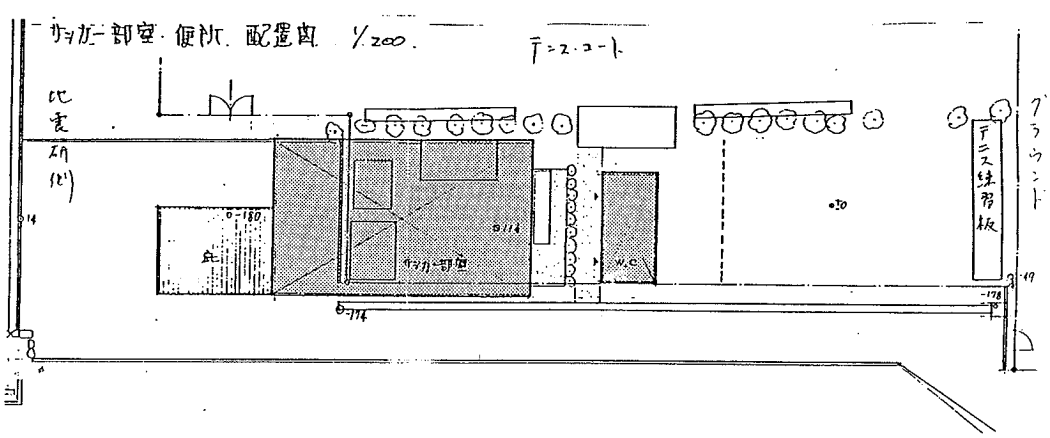
つきましては、さる10月11日の第２回募金委員会々合で、未だご応募頂いておらぬOB諸兄に対し、再度のお願いをすることに決定致したとおり、この度、同封の依頼書をお送りしましたので、同封の卒業年度別募金状況をご参照のうえ、同年次のチームメイトに、お電話などで今一度の働きかけをお願い申し上げます。

ご多用中のところ誠に恐縮でございますが、なにとぞ実行委員会の意のあるところをおくみ取り頂きまして、ご協力を賜わりたく、重ねてお願い申し上げる次第であります。

敬具

資料－2


サッカー部室
施設等設計図面
7.33×12＝87.96
87.96×2＝175.92㎡
（総面積）
車4室
ミーティングルーム
2階
ロッカー室
玄関
1階


サッカー部室・便所・配置図 1/200
テニスコート
比良
川
グラウンド
テニス練習板
サッカー部室
W.C

資料－3

## サッカー部室　概算積算

単位；円

| 名称 | 数量 | 金額 | | |
|---|---|---|---|---|
| 仮設工事 | 一式 | | 400 | 000 |
| 基礎工事 | 〃 | 1 | 200 | 000 |
| スタンオフィス本体 | 〃 | 7 | 500 | 000 |
| 同上 オプション | 〃 | 5 | 050 | 000 |
| 同上 輸送設置費 | 〃 | | 900 | 000 |
| 給水配管 | 〃 | | 500 | 000 |
| 給湯配管 | 〃 | | 400 | 000 |
| 排水配管 | 〃 | | 450 | 000 |
| 器具取設 | 〃 | 2 | 800 | 000 |
| 諸経費 | 〃 | 1 | 500 | 000 |
| 小計 | | 20 | 700 | 000 |
| | | | | |
| | | | | |
| 備品費 | | 3 | 300 | 000 |
| | | | | |
| | | | | |
| 総計 | | 24 | 000 | 000 |

資料－4

## サッカー部室・備品について

単位；千円

| 種 | 備品名 | 数量 | 単価 | 金額 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| ミ | テーブル | 18 | 20 | 360 | |
| ミ | 折畳椅子 | 54 | 5 | 270 | |
| ミ | 白板 | 1 | | 20 | |
| ミ | テレビ | 1 | | 90 | |
| ミ | ビデオ・デッキ | 1 | | 90 | |
| ミ | 保管庫 | 2 | 30 | 60 | |
| ミ | エアコン | 1 | | 300 | |
| | 小計 | | | 1190 | |
| 事 | デスク・イス | 2 | 25 | 50 | |
| 事 | 保管庫 | 2 | 25 | 50 | |
| 事 | ビデオ・カメラ | 1 | | 100 | |
| 事 | キッチン・ユニット | 1 | | 150 | |
| 事 | ビデオ・デッキ | 2 | 50 | 100 | |
| 事 | テレビ | 2 | 40 | 80 | |
| 事 | パソコン | 1 | | 400 | |
| 事 | コピー | 1 | | 300 | |
| 事 | 電話(ファクス付) | 1 | | 120 | |
| | 小計 | | | 1350 | |

| 種 | 備品名 | 数量 | 単価 | 金額 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| ロ | ロッカー(6人用) | 9 | 40 | 360 | |
| ロ | 冷蔵庫(製氷、冷水用) | 1 | | 50 | |
| ロ | ベンチ | 6 | 10 | 60 | |
| ロ | 扇風機 | 4 | 10 | 40 | |
| | 小計 | | | 510 | |
| シ | 掃除用具一式 | 1 | | 10 | |
| シ | スノコ | 2 | 5 | 10 | |
| | 小計 | | | 20 | |
| 洗 | 洗濯機 | 2 | 35 | 70 | |
| 洗 | 乾燥機 | 1 | | 40 | |
| | 小計 | | | 110 | |
| 玄 | 掃除用具・掲示板等 | 1 | | 40 | |
| ウ | バーベル・セット等 | 1 | | 80 | |
| | 総計 | | | 3300 | |

※ミ…ミーティングルーム　※洗…洗面所
※事…事務室　※玄…玄関
※ロ…ロッカー室　※ウ…ウェイト・トレーニング用
※シ…シャワー室

# Ⅲ　回想・部史（追加分）

## あ の こ ろ

昭和19年９月卒　　齋　藤　賢　吾

年があらたまって間もなく、昭和天皇が崩御せられ、ご諒闇（りょうあん）に入ったばかりの昨今、テレビを始めマスコミでは昭和史の回顧がブームのさなか、これに食傷気味の方には、またまたレトロ調の昔話でまことに申訳ないが、しばらくのご辛抱をお願いしたいと思う。

私が在学していたのは、昭和16年４月から昭和18年10月までで、卒業が昭和19年９月になっているのは、入学の年太平洋戦争が勃発してようやく戦局が熾烈となってきたので「徴兵延期」が廃止され、学業中途のまま軍隊へ入隊後の希望として「仮卒業」（将来軍隊から復員後再就学もできるが、一年後無事なら正式卒業を認めるというもの。二者拓一であった。）を選択したためで、いわゆる「出陣学徒」であった。

それはともかく、私の大学生活は、きわめて不本意なものであった。入学前、１年間の浪人生活ですっかり体調を崩してしまい、50mの疾走さえできず、練習のあとなどクーリングダウンのためそろってグラウンド一周の駈足をするが、大谷（昭17.9卒、全日本代表、一高）が走りながら手を握って私を制止してくれたほどだった。だから試合に出してもらうどころではなかった。浪人中に旧制六高からの直木先輩（昭16卒、全日本代表、終戦直後夭折）が、「一緒にボールを蹴りに来ないか。」と誘ってくれたが、旧制岡山二中時代から数えて数年間も蹴りつづけてきた手前、甘えたいのは山々だったものの、結局その気になれず、一年間スポーツらしいことは何もしなかった反動がきた。また東京の「水」が私の身体に合わなかったせいもあったろう。私が最も恐れたのは戦前「不治の病」といわれた肺結核であった。入学するや有馬（昭16.12卒、全日本代表、浦和）が瀬田先生（ボート部の大御所）のもとへ連れていってくれたが、どうもはっきりしない。その中横山主将（昭16.12卒、東京）からプレーイングマネージャーという有難くもない役を仰せつかって細々ボールを蹴る仕儀となった。

しかし、何もしなかったわけではない。昭和17年度優勝に関わる対商大戦（５月16日、新丸子、日本医大グ）にはRWで出場、初得点をゴールのど真中へ叩き込み、前年商大と引分けたばかりに単独優勝を逃がしたウサを一挙に晴らしチームの意気大いに上ったものだ。また、奥瀬（昭18.9卒、全日本代表、浦和、故人）や種田（昭17.9卒、浦和、ご令兄

は昭11ベルリンオリンピック代表、昭25第８回朝日招待サッカー出場）の依頼で旧制浦和高－商大予科定期戦の主審として浦和へ行ったり、学内サッカー大会（昭16.12、昭18.1）の世話をしたりした。大会には毎回25チーム前後の申込があり、なかなか盛大だったが空手部、陸上部、野球部、排球部、水泳部、ヨット部、軟式野球部などはよいとして、変ったところでは林学科、支那哲科、東洋史科、Y. K. T.、西洋史科、心理学科、美学科、社会科、国文科、教育科といった文学部の各科までが参加したものである。最近の学内サッカー大会は如何なものであろうか。

それから忘れることができないのは、昭和18年３月の春休みの一週間、横山の指示で小田原中学（現在の県立小田原高校）へサッカー・コーチに行ったことである。もともと強いチームではあったが、強化合宿のため招かれたのである。雨の日は教室で、旧制六高時代に自分でまとめた「基礎訓練」を教材にして講義した。当時の主将宮沢君はその後中大に進み活躍した。

学徒出陣のわれわれ学生が学生服のまま陸軍部隊（私は岡山）に入隊したのは昭和18年12月１日だった。早速厳しい軍隊生活に入ったが「（お粗末な）お前達が兵隊になれたのはルーズベルトのおかげだ。」とばかり、まるで半人前扱いで、毎日毎晩身も心もしごかれた。しかし、もともとサッカーで鍛えた私には、演習や駈足、行軍など身体的いじめはさして苦にならず、数ケ月のうちに駈足（マラソン）では中隊で誰にも負けないぐらいに健康を回復していた。

大した身体の損傷もなく無事復員できた私は、さしづめ仕事もないので郷里岡山で蹴球協会の役員をつとめ、県下中等学校選手権大会を開いたり、インターハイ直前の旧制六高を指導したりした。（昭21.10.20六高優勝。因みに旧制インターハイは昭22.11.30広島優勝－東大グーで幕を閉じた。）

かくするうち、私は縁あって実業団サッカーの雄といわれた第一生命本社に入社（詳細はあとでのべる）、再びボールを蹴っているうち、古巣のLBにも顔を出すようになった。その第一戦が第一回東日本都市対抗（昭22.4.27－昭22.6.8メンバー：近藤、大貫、斉藤、森、横山、竹腰、天野、阿部、奥島、岡本、三上、有馬）で、決勝トーナメント出場は、予選決勝で第一生命を降した東京（LB）のほか藤沢、埼玉、仙台、山梨などだった。（結果は、山梨を決勝で破りLBが優勝。）

ところが、翌年の第二回（昭23.6.1－昭23.6.6、LB、鎌倉、豊田村、甲府、宇都宮参加）では大変な醜態を演じてしまった。まず東京都ではWMW（早）、BRB（慶）、東蹴、

全文大のうちの勝者が前年覇者のLBにチャレンジすることになり、出てきたWMWを破った（２－１）LBが再度代表になったまではよかったが、本番の決勝では鎌倉に（２－１）で敗れ、新聞で酷評を蒙った。鎌倉には早川（昭24卒）、大埜（昭26卒、全日本代表）がいたとはいえ、一瞬フリーにした大埜にゴール左上に決勝点をきめられたシーンはいまだに忘れられない。（メンバー：近藤、大貫、須賀、松元、横山、斉藤、岡本、天野、有馬、奥島、三上）

明けて昭和24年１月には、東、早、慶、明、立、文大による六大学OBリーグが始まった。圧巻は、慶大が全勝で迎えた最終日（昭24.2.27）、二位争いの東早宿敵同志の一戦であった。結果は（３－３）の引分けで双方同率二位に終ったが、試合の後半間もなく、私は高いボールをジャンプヘッドでとった直後、早大の岩谷（全日本代表、故人）に左眼をもろに蹴られて負傷退場、三針の大怪我をした。幸い観戦中の二宮氏（慶大出、全日本代表）が急ぎ医局に連れて行ってくれ、眼球に損傷のないことが分かってホッとしたが、いかになんでも相手がジャンプした頭の位置まで足を上げるなんてと当時は口惜しかった。試合終了後表彰式で早大の堀江氏（昭11ベルリンオリンピック代表）が「東大は少ない人数で同率なのだからお先にどうぞ。」と受賞順を横山に譲ったそうだが印象的な言葉であった。余談だが、この怪我のおかげで今の家内との見合予定が一月ほど延びてしまった。（メンバー：近藤、斉藤、森、力石、横山、有馬、岡本、奥島、竹腰、高山、三上　。）

当時の記録を整理してみて、新聞評で苦言を呈された試合はもう一つあった。それは復活第二回全日本選手権（昭24.6.5対関大決勝戦、東伏見）で、「ビッグゲーム中の最悪ゲーム」とこきおろされたが、選手側にしてみれば「全日本」というからには現在の国立競技場のような整備されたグラウンドで存分に戦いたかった。（当時は、まだ国立競技場は接収下にあり、ナイルキニック・スタジアムといわれ滅多に貸してもらえなかった。）

さて、終戦直後のサッカーを語るとき、どうしても私の奉職していた第一生命とLBとの関わりあいについて触れないわけにはいかない。第一生命は、今でこそ昔の面影はなく大企業の悲哀の一面を物語るように「東京都社会人リーグ第三部」と低迷しているが、戦前から実業団の雄として知られ何度も優勝したことがあり、私が入社後も二度目の黄金時代を迎えることになった。先にも話した第一回東日本都市対抗東京予選（昭22.4.27－22.5.8）では名にし負う早大WMWを延長の末撃破、つづいて慶応BRBをも破って、いよいよLBと決勝を争うことになったから大変である。破竹の快進撃にスポーツ紙は、興奮気味。会社としてもLBに勝てば「首都の覇者」になるというので会社挙げての大応援団が

御殿山を埋めた。そのわれんばかりの大喚声はOL諸君の黄色い声援をも交えてグラウンドは大きくどよめいたものだ。試合の方は、その甲斐もなく（６－０）の完敗に終ったが、その後も強豪同志の宿命であろうか（？）よく対戦した。その年の９月第二回国体予選でも相対し（４－０）で負けはしたが、翌23年９月の第三回国体予選（第一師範－現在の学芸大）では大破乱が起きた。私ははじめ同じ負けるにしてもだんだん点差が縮まってきたことだし、せいぜい（２－０）ぐらいでまた負けだろうと思っていた。ところが意外や意外、結果は（２－１）で勝ってしまった。早朝の試合で終ってもまだ朝もやが残っていた。

お話かわってご縁が深かった点では、ダンスパーティーがある。当時は剣道、柔道がご法度で、一方社交ダンスが大流行だった。道場はダンスホールに早変り、剣道師範はダンス教師に変身した時代だったので、各校サッカー部はこの波にのって部活費の一助にと競ってパーティーを催した。第一生命のOL諸君もよく協力してくれた。ダンスホールは「エーワン」「永楽クラブ」とか「工業クラブ」。早大は五反田の「カサブランカ」を使っていた。話が少しそれるが、英国空母「ユニコーン号」の乗組員チームが来たときである。（昭25.4.21、特設サッカー場は、現在の「東京ドーム」の西側にあった競輪場。）観戦に行っていた私に対し協会から「歓迎のため花束贈呈をするので女性三人をすぐ集めてくれ。」といきなりの注文である。ここでもお役に立ったのが、第一生命のOL諸君で、あわやの急場をしのぐことができ、今でも感謝している。

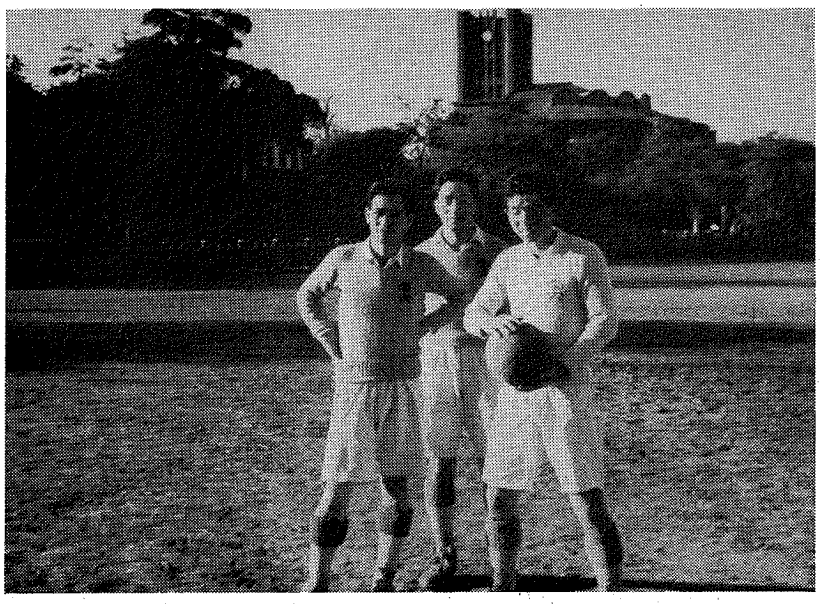
ついでながら、ちょっとPRさせて頂くと、第一生命総合グラウンドは、昭和30年以来京王線沿線烏山（からす）にあり、サッカー場はもちろんのことクラブハウスなども完備しており、東京オリンピックにはサブグラウンドとして公認され優勝したハンガリーほか外国チームも利用した。整備された芝生はいかにも美しい。LBとは昔のよしみもあり、もちろんかつての強豪同志の対決の再現とはいかないが、一度現役諸君とお手合わせをお願いしたいものである。

最後に、終戦をはさんで前後ざっと10年、共に球を蹴り共に酒を汲み交してLBの歴史を飾った今は亡き仲間達や先輩を想い起こしてみることにする。

太平洋戦争の真只中、台湾沖の空中戦で壮絶な戦死を遂げた木村（昭18.9卒、水戸）。南アルプスを強行縦走した翌日、ケロリとして試合に出たタフな男。戦後試合のあといつも不便をしていたのが風呂だが、手づくりの「なげいれ電熱器」で“野戦風呂”をわかしてくれた三上（昭19.9電気科卒、全日本代表、一高）。こんど新設されたシャワー室や浴室を思い合わせると、まことに感慨ひとしおである。昭和24年11月、加藤（昭19.9卒、全日本

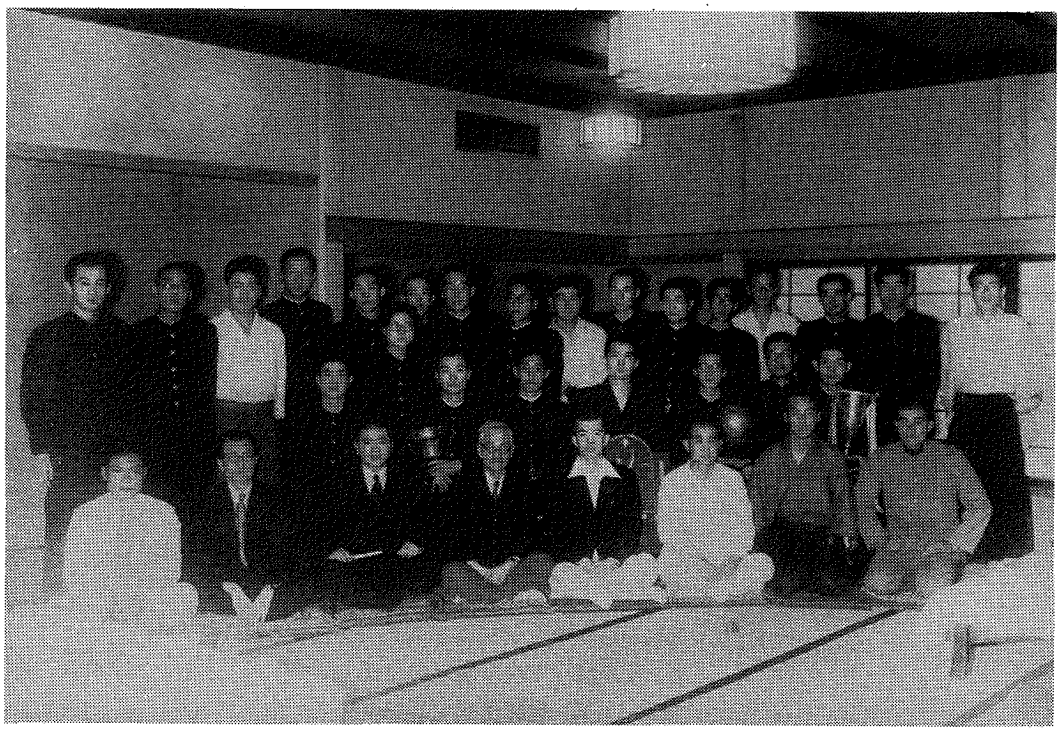
代表、一高）が上京してきたので歓迎会と称して大貫（昭19.9卒、全日本代表、成城）や三上、それに私を自由ケ丘の自宅に招いてくれた世話好きの近藤（昭19.9卒、府立）。戦時中、卒業直後海軍の「短現」（短期現役。海軍は昭和13年から幹部士官育成のため、大学、専門学校から主計科士官の募集を始めていた。海軍主計学校は築地にあった。）を志願し、南方戦線を転戦中終戦、シンガポールのチャンギー刑務所の捕虜となったが、原住民の証言次第で死刑台の恐怖におびえる毎日、極限の苦悩を味わったという奥瀬。だがこれは他人のことで、どうも事実無根だったことが最近になって分かった。茶目気のある人だ。いつぞや山上御殿での納会の席上、大先輩の篠島さん（昭６卒、極東オリンピック代表、10代の花形とはやされたという。LBへのご寄附は特大だった。故人）が挨拶に立っていわく「私の部生活の毎日は被害者だった。その加害者はこの人であります。」と指差されて苦笑いしていた竹腰（ノゴ）さん。頑固にサッカーひとすじだったがために現役諸君から煙たがれたのもむべなるかなと思わせる一幕だったが、カン高いあの意味不明の高笑いはもう聞けなくなった。

今は平成の御世。みんな昭和の歴史と共に行ってしまったような気がする。これらの人達は天国でいまごろどうしているだろうか。相変らずノゴさんを囲んで夜毎「サッカー談義」に花を咲かせているにちがいない。あらためてご冥福を祈ってやまない。

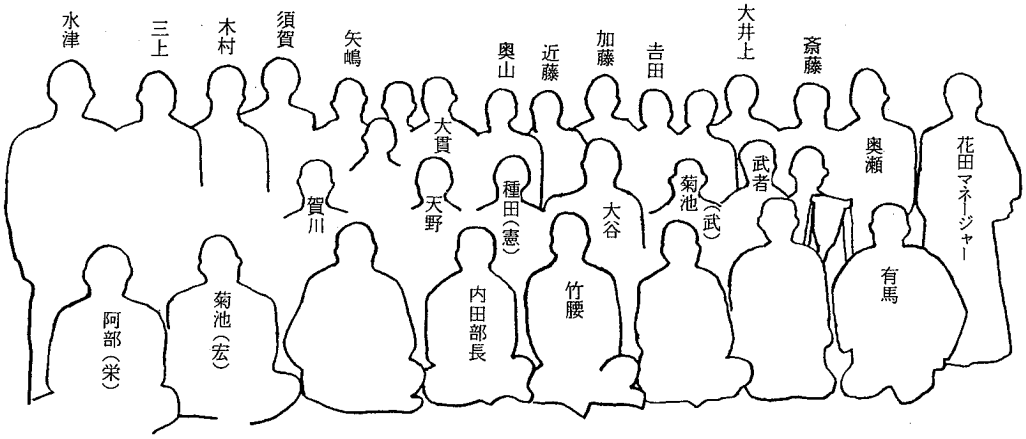


Light Blue のユニフォームを着たスナップ
左より斉藤、木村、奥瀬の三氏
（昭和17年、御殿下グラウンドにて）

第一回東日本都市対抗関東予選・優勝した東大ＬＢ
（後列左より）天野、竹腰、横山、奥島、岡本、有馬
（前列左より）大貫、近藤、森、阿部、三上、斉藤
（昭和22年6月8日）



昭和17年度春季リーグ戦優勝・祝勝会
（昭和17年6月21日）



## 部　史（昭和21年～昭和26年追補）

闘魂３号には収録されていない東大LBの戦績を中心に記載しました。

齋藤賢吾氏（昭和19年卒）の資料によります。

### 昭和21年度

◎東西大学対抗サッカー　22.1.12（日）（西宮）

全東大　5（1－0 / 4－1）1　全神経大

### 昭和22年度

◎第１回東日本都市対抗東京予選

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 東大ＬＢ | ２－０ | 全一橋 | 4.27（日）（八幡山） |
| | 東大ＬＢ | ８－１ | 豊島サッカー | 4.29（祭）（　〃　） |
| ［準決勝］ | 東大ＬＢ | １－０ | 西片クラブ | 5．3（土）（東　大） |
| ［決　勝］ | 東大ＬＢ | ６－０ | 第一生命 | 5．8（木）（　〃　） |

◎第１回東日本都市対抗

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 東大ＬＢ | 3（1－1 / 2－1）2 | 藤沢クラブ | 5.24（土）（東　大） |
| | 東大ＬＢ | 4（3－0 / 1－1）1 | 埼玉クラブ | 6．1（日）（　〃　） |
| ［準決勝］ | 東大ＬＢ | 9（3－1 / 6－0）1 | 仙台クラブ | 6．7（土）（　〃　） |
| ［決　勝］ | 東大ＬＢ | 4（1－1 / 3－1）2 | 山梨クラブ | 6．8（日）（　〃　） |

◎第２回国体東京都予選兼東京選手権大会

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 東大ＬＢ | ２－１ | 東蹴Ｂ | 9.20（土）（東　大） |
| | 東大ＬＢ | 4（0－0 / 4－0）0 | 第一生命 | 9.21（日）（　〃　） |
| ［決　勝］ | 東大ＬＢ | １－２ | 早大WMW | 9.24（祭）（　〃　） |

昭和23年度

◎親善試合

東大　1（0－0／1－0）0　インドネシア　　4.10（土）（東　大）

◎第２回東日本都市対抗東京予選

［決　勝］　東大ＬＢ　2（1－0／1－1）1　早大WMW　　6．1（火）（東　大）

◎第２回東日本都市対抗

東大ＬＢ　7（2－0／5－0）0　宇都宮クラブ　6．5（土）（東　大）

［決　勝］　東大ＬＢ　1（1－1／0－1）2　鎌倉クラブ　　6．6（日）（　〃　）

東京のほか、鎌倉、豊田、甲府、宇都宮、郡山が参加。

◎第３回国体東京都予選兼東京選手権大会

２回戦　東大ＬＢ　1（0－0／1－2）2　第一生命　　9．5（日）（第一師範）

◎第７回朝日招待サッカー

全東大　1（0－0／1－1）1　全関大　　24．1．8（土）（西　宮）

◎六大学OBリーグ

東大ＬＢ　9（4－0／5－0）0　明大　　24．1.30（日）（東　大）

メンバー：近藤、斉藤、森、力石、横山、有馬、岡本、奥島、竹腰、高山、三上

東大ＬＢ　—　立大　　24．2．6（日）（東　大）

東大ＬＢ　—　文大　　2.13（日）（　〃　）

東大ＬＢ　2（1－0／1－3）3　慶大　　2.20（日）（　〃　）

東大ＬＢ　3（2－1／1－2）3　早大　　2.27（日）（　〃　）

慶応が全勝で１位。東大、早大が同率２位であった。

◎その他

昭24.3.21（祭）に西宮で行われた学生・OB東西対抗の学生東軍に馬渡、早川、高

橋、大埜の四氏が、OB戦には三上、有馬、横山の三氏が選ばれている。

昭和24年度

◎全日本選手権東京予選

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 東大ＬＢ | 1 | (1－0 / 0－0) | 0 | 聖ポール | 5.27（金）（東　大） |
| | 東大ＬＢ | 2 | (2－0 / 0－1) | 1 | 早大 | 5.28（土）（　〃　） |
| ［決　勝］ | 東大ＬＢ | 2 | (1－1 / 1－0) | 1 | WMW | 5.29（日）（東伏見） |

◎第４回国体東京都予選兼東京選手権

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 東大ＬＢ | | 5－0 | | 青蹴会 | 9.18（日）（大泉高） |
| | 東大ＬＢ | | 2－1 | | 駿台クラブ | 9.25（日）（武蔵野） |
| | 東大ＬＢ | 2 | (1－0 / 1－1) | 1 | WMW | 10. 1（土）（　〃　） |
| ［決　勝］ | 東大ＬＢ | 5 | (3－0 / 2－0) | 0 | BRB | 10. 2（日）（　〃　） |

昭和25年度

◎英国空母ユニコーン号乗組員チームとの親善試合

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 全日本ＯＢ・関東学生選抜 | 4 | (2－0 / 2－0) | 0 | 英空母ユニコーン | 4.21（金）（後楽園） |

大貫、有馬、大埜の三氏が出場した。

◎第５回国体東京都予選兼東京選手権

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 東大ＬＢ | 6 | (2－0 / 4－2) | 2 | 第一生命 | 9.24（日）（武蔵野） |
| ［決　勝］ | 東大ＬＢ | 2 | (1－1 / 1－2) | 3 | 東蹴 | 10. 8（日）（　〃　） |

メンバー：山本、大貫、中村、海老原、丸山、？、岡本、高橋、三上、大埜、秋山

| 東大LB | | 東蹴 |
|---|---|---|
| 3 | GK | 11 |
| 8 | CK | 3 |
| 4 | FK | 6 |
| 0 | PK | 1 |

昭和26年度

◎第31回全日本選手権兼関東予選

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 東大ＬＢ | 6 | （5－0 / 1－0） | 0 | 第一生命 | 4.22（日）（東伏見） |
| | 東大ＬＢ | 2 | （1－0 / 1－0） | 0 | 浦和クラブ | 4.29（日）（　〃　） |
| | 東大ＬＢ | 5 | （2－0 / 3－0） | 0 | 中大Ａ | 5. 6（日）（　〃　） |
| ［決　勝］ | 東大ＬＢ | 2 | （1－1 / 1－3） | 4 | 全立大 | 5.13（日）（武蔵野） |

◎第６回国体東京都予選兼東京選手権

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 東大ＬＢ | 7 | （4－1 / 3－0） | 1 | 第一生命 | 9.16（日）（武蔵野） |
| ［決　勝］ | 東大ＬＢ | | 1－2 | | 立大 | 9.24（祭）（　〃　） |

## 創刊号より20数年を経て

昭和19年９月卒　　須　賀　敏　孝

本年「闘魂」部室建設記念号を刊行するに当り、創刊後20数年を経た現在、当時部誌として発刊される迄の経緯を改めて述べ、今後の参考に供したいと思います。私は昭和34年４月より、前監督大埜正雄氏の後を受け、御殿下グラウンドに立ちました。私は戦争中、大学繰上げ卒業（昭和19年）と同時に戦線に参加し、復員後農林省勤務を経て家業を継ぎ漸く落着いた頃で、暫く振りのサッカーでした。家よりグラウンドは近かったので練習には良く顔を出し、東大サッカー第三期黄金時代を目標に声を嗄らしたものです。就任して１年目安達良英キャプテン（途中で小山氏）で二部優勝、３年後梅村キャプテンの時２度目の優勝を果たしましたが残念乍らまたも入替戦で法大に１－０で破れ、念願の一部復帰成らず無念の思いを後輩に託しました（当時は優勝校のみ入替戦出場）。梅村氏より優勝を記念して卒業後も私を中心にボールを蹴りたいとの希望を聞いたのは、彼等の卒業間近の事でした。それではということで、京大の卒業生も交えた御殿下クラブがここに誕生、東京クラブリーグに加盟して試合に出場した処、とんとんと勝ち進み見事優勝、東京クラブリーグで第１位となり、翌年関東リーグ入りをしこれまた輝やかしい成果を得ました。目下御殿下クラブは休部状態ですが、その後浅見俊雄氏を中心として「御殿下少年サッカークラブ」が結成され皆さんも御承知の如く現役の方達のアシストを得て現在に至っています。

さて、先輩等に後事を託された安達キャプテンを中心とする39年卒12名は、前年度に負けず非常に団結力のあるチームで、試合では優勝こそ逸したものの、何か後々のため意義あるものを残したいという訳で、先輩達の足跡を辿る事で技術的な面プラスアルファの部分として部の強化の一助となりまた先輩後輩の意識の疎通を図る事が出来れば幸甚であろうと、部誌の発刊に踏切ったのです。然し部での編集の仕事は仲々困難を極め、山積する諸問題を、安達氏、宇尾マネージャーを始め部員が一丸となり、今は亡き新田先輩、また安東部長他多数の諸先輩、また京大、日体大の方々、陰から常々応援していて下さったミクニ椚田氏、そばやの大田氏等の心暖る御資料や御協力を頂き、表紙は小川氏得意の版画とし、最後に部誌名という事で相談があり私とて苦手な事故困惑致しましたが三つ程候補が挙がり「球音」「蹴足」「闘魂」の中から皆さんに選択して貰った処、どうも日頃のグラウンドでの私の方針に相応しい「闘魂」という事になったようです。序でに表紙の字もと

請われましたので恐縮ながら当時の監督として書かせて貰いました。完成してみますと、東大サッカー部史上初の試みであり、短期間にこれ程の内容を有し誠に意欲的な出来上りと感心したものです。その後、2、3号と続き、東大百年の記念事業の一環として、今回長く使用していた御殿下グラウンドを離れ、農学部のグラウンドへ、また新たに部室も建築されるとの話で「闘魂」部室建設記念号の刊行と伺いました。誠に結構なことと思います。私も、早くも古稀を迎えようとする時、顧みますとサッカーからはずっと離れずに来てしまいましたが、サッカーを通じた各校の先輩、後輩、また他校のお仲間と現在も尚、限りなくよい関係を保っております。

運動部で汗を流し合った者同志が味合える喜びと思います。皆さんもどうぞその関係を末永く暖めて下さい。微力ながら、東大サッカー部のためお役に立つ事があれば、少しでも多くと常々思っています。

毎度ながら先輩後輩の皆さん、時間がありましたら、グラウンドへ足を運んで現役に声をかけてやって下さい。

平成 1. 1.30

# 農学部の合宿所

昭和35年卒　　小　山　冨士夫

昔々、今を去ること30年前、農学部のグラウンドに東京大学ア式蹴球部の合宿所が建っていた。昭和32年、先輩であった故野津医学博士の診療所を頂いて、農学部に移築したものであった。

木造平家建、正面左手の玄関を入ると、左手にトイレ・風呂があり、コンクリのタタキを進むと、つき当りに管理人の住居部分があって、高橋さんという老人夫婦と、末っ子のコーチャンという少年が住んでいた。今から思えば、とても考えられない様な住宅事情で、そんなところにも管理人として住み込んで下さる方がいたのだ。コンクリのタタキを管理人室につき当って右に折れると、右手に10畳位の部屋――この部屋は南に面していて、メインの部屋であった。そして、つき当りが２つに分かれて８畳位の部屋があり、この３つのタタミの部屋で、我々は合宿した。

場所は、今の地震研の建物が建っている部分の、一番東側に当るところで、向ってすぐ右側には、野球部のネット裏スタンドがあり、また裏門を出るとだらだら坂を下って、根津権現の境内に出ることが出来た。地震研の建物は、30年代後半から、何期にも分けて建築されており、40年代の初めには、我が東大サッカー部合宿所は、その10年足らずの歴史を閉じたものと思われる。そして、この合宿所が東大サッカー部が持った、あとにもさきにも唯一の、管理人が居た宿泊設備を備えた「合宿所」であった。その消滅から、すでに20年の歳月が流れた。そして、この度西本先生を初め、関係者の大変なご努力によって、旧合宿所の西南約50m位の場所に、新しい部室が建設されるはこびとなった。新しい部室は宿泊設備こそ持たぬが、学生・OBが相集い、語り合える場所となるはずであって、今後末永く、我が東大サッカー部の根城となる様に希望したい。

さて、私は昭和31年の春に、東大サッカー部に入れていただいた。そしてこの年の秋のリーグ戦で、東大サッカー部は創部以来初めて、関東大学リーグ、一部リーグを陥落することになる。あのときの有り様は、未だに脳裏に焼き付いて離れない。相手は法政であった。32年は一部復帰を目指して、当時学生部におられた横山陽三監督のもとに、学生も大いに頑張り、OBも合宿所を建てるなどして、肩を入れていただいたわけだが、日大との優勝決定戦に敗れて涙を呑んだ。そして、この年の追い出しコンパは、農学部の合宿所で、スキ焼きをかこんでやけ酒を飲むことと相成った。傷心の五十嵐洋文キャプテンの酔態を

はっきりおぼえている。余談だが、当時の学生は、今の学生諸君とちがって、ヘドを吐くまでめちゃ飲みをしたものだ。敗戦の思いとアルコールが、どの様な作用をおよぼしたか、容易にご想像いただけると思う。ところが、明けて昭和33年の１月30日の夕刻、練習から帰る途中の五十嵐さんが、赤門前でタクシーにはねられて急死する事故が起り、東大サッカー部は悲しみにつつまれた。この五十嵐さんの死こそは、当時の東大サッカー部の不運を象徴する事件で、横山監督はじめ、我々部員一同は、多摩墓地の五十嵐家の塋域に石碑を建てて、彼の死を悼んだ。

33年のシーズンは、大埜正雄監督のもとに幸さきの良いスタートを切った。６月の全日本選手権関東地区予選で、早稲田WMW（２－１）、古河電工（３－１）、全立教（３－２）を破って、本選出場を決めたことだった。第38回全日本選手権（天皇杯）は、その年の９月初旬に藤枝市で開催され、全国から予選を勝ち抜いた16チームで争われた。９月だというのに猛暑が続き、加えて藤枝東高校のグラウンドが、照り返しのきつい、白っぽい砂地のグラウンドで、皆、激しい消耗状態に陥った。岩動洋二チームドクター（故人）は、最近発売になったアリナミンというビタミン剤が効くらしいということで、注射器とアンプルを買って来て、皮下注射を実施した。我々スペアーは、その難をのがれたが、（実は金がなくて、スペアーの分まで買えなかったのだ）ビタミン剤の皮下注射がどんなに痛いものか、その後永く語り草になった。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 監　督 | 大　埜　正　雄（OB） | | |
| ドクター | 岩　動　洋　二（OB故人） | | |
| GK | 長　浜　　毅（現役３年） | | |
| FB | 柴　沼　　晉（OB） | | |
| | 高　田　宗　昌（現役４年） | | |
| HB | 服　部　一　郎（現役４年） | | |
| | 海老原　　朗（OB） | | |
| | 原　　忠　彦（OB） | | |
| FW | 藤　本　鉄　也（OB） | 補欠 | 安　達　良　英（現役３年） |
| | 中　島　　裕（OB） | | 小　山　冨士夫（現役３年） |
| | 岡　野　俊一郎（OB） | | 高　場　真　平（現役２年） |
| | 浅　見　俊　雄（OB） | | |
| | 島　田　武　夫（OB） | | |

藤枝市は、東海道53次の宿場町で、我々の宿舎に割り当てられたのは、売春防止法で商売換えをしたばかりの十九万（トクマン）というお女郎屋さんだった。

一回戦は京都紫光クラブで、延長の末３対２で勝った。この延長戦が普段練習不足のOB達に、多大のダメージを与え、アリナミン注射の原因を作ったのだった。２回戦は東洋工業に１対０で勝ったが、この試合でHBの原さんがダウンして、準決勝の対八幡製鉄戦には私が起用されて、10番のユニフォームを着、浅見さんがHBに下がるという布陣で戦う破目になった。寺西プレイング・マネージャー率いる八幡製鉄に対し、善戦したが、ウィングの井沢に鮮やかなヘディングシュートを決められて、１対０で破れた。３位決定戦は、地元の志太クラブをよせつけず、３対０で勝ち、３位ということになった。これが東大LB最後の大舞台といわれる全日本選手権出場の顛末である。

藤枝から帰ってすぐに、秋のリーグ戦が始まった。順調に勝ち点をあげたが、最後日大に破れて、またしても合宿所の涙のスキ焼きパーティーと相成った。

翌34年には、私も４年生になっていた。須賀敏孝監督、安達良英キャプテンで秋のリーグ戦に臨んだが、安達キャプテンが２試合目位で腹膜炎で倒れ、以後わたしがキャプテン代行をつとめた。そして一部陥落以来初めて、この年に二部優勝をかちとった。当時学連の役員をされていた元監督の横山さんから、二部の可愛らしい優勝カップを、御殿下グラウンドで授与された記憶がある。

そして一週間後、御殿下グラウンドで、宿敵法政と一部復帰をかけて戦った。劣勢ながらよく頑張ったのだが、法政の大原君というセンターフォワードにしてやられて、１対０で涙を呑んだ。爾来、二部優勝、入替戦出場の機会は何回かあったが、一部復帰は成らない。時代という他はあるまい。

## 新部室建設にあたり――雑感

昭和50年卒　　吉　澤　伸　明

今回の新部室建設にあたり、若干の経緯と今後の方向について、思いつくままに書いてみたい。

振りかえれば、昭和57年11月の要望書から始まる長いプロセスがある。昨年に入り募金活動が始まっても、今度は、学生部と部室の広さや位置で、大論争となり、真夏のある一夜遂にあの記念すべき安田講堂で、団交となったこと、今や懐しい思い出である。(先方は小林学生部長以下、こちらは浅見、西本両OBを筆頭に、斉藤氏（S37)、中村氏（S38)、大塚氏（S44)、手島氏（S47)、俵氏（S47)、兵頭氏（S50)、平林監督など)

思えば、サッカー部は、数年間にわたり、御殿下グランドに、突如姿をあらわした骨董品により、プレハブの部室と手狭な農学部グランドに追いやられ、ジプシー生活を強いられたのである。御殿下グランドで、遂に一度もタマ蹴りをすることなく、OBとなった学年が出現してしまった。

そして次に登場したのが、人工芝である。運動より管理を優先する学内論理から、人工芝の方針はくつがえらず、農学部にホームグランドを移すことになった。御殿下グランドの歴史、地の利から惜しむ声も多かったが、今や、この決断は、英断と思う。引き換えにグランドの改修費として6千万円を大学予算から、部室建設費として1,400万円を百年記念事業予算から獲得することに成功した。これは西本部長、平林監督を始めとするOBの尽力の結果であり、サッカー部史上特筆すべきことである。

これらの動きと前後して、OBの間で、かつての御殿下クラブの再興の話が出た。御殿下クラブといえば、須賀先輩（昭和19年卒）の呼びかけで、創設され、東京都社会人リーグでも好成績を収めた社会人チームである。当初は学外のメンバーも加え、いわゆるクラブチームを目指したが、近年はメンバー集めに苦労し、実質的に活動は停止状態にある。もう一つの活動として、浅見前監督（昭和31年卒）が創設した御殿下サッカースクールがある。

小中学生を集めて、御殿下グランドで、毎週日曜日の午前中に開くサッカー教室である。構想としては、、サッカースクールをジュニアチームとし、御殿下クラブを社会人チームとする一貫したクラブ形式を確立し、ゆくゆくは、クラブハウス等も持ちたいという夢が

語られていたと思う。（学生の頃趣意書らしきものを読んだことがある）

現在、サッカースクールの方は400人の生徒を集め、盛況を極めているが、指導は戸刈先生（現教養学部体育科助教授）と同助手兵頭OB（昭和50年卒）があたり、コーチはアルバイト中心といった状況である。

この二つの活動を結びつけ、新グランド、新部室で活性化をはかろうという意図である。しかし、これには異論もある。大学のグランドという公共施設を、営利目的ではもちろんないが、半ば独占的に利用することの問題。もう一つは、運営の問題。大学のサッカー部、LB会、社会人チーム、サッカースクールという４つのメンバーの異なる主体が活動することになる。当然会計は区別されなければならないのが、相互利用には節度をもちつつ、知恵を絞る必要がある。この二つの問題については、各年代のOBにより、ニュアンスも異なり、さまざまな意見がある。

例えばサッカースクールで購入した用具を、現役が使用するのは問題ではないか。あるいはその逆もある。また、大学職員、学内の同好会チームがグランドを利用する権利と、どう調和させるか……等々。

これら一連の問題は、いわばサッカーに関する各種の活動を拡大させようとするとき、必ず起こる問題である。それぞれに、社会常識に基づき運用ルール、費用分担を決めていけばいい問題が多いように思う。

現在、現役の指導は、何人かの社会人の監督（本業はあくまでサラリーマン）を経て、平林監督（昭和55年卒）という、サッカーでいわば「メシを食う」ことを志したOBにお願いしている。ここ数年のジプシー生活に耐え、サッカーをめぐる環境も、また学生気質も大きく変化していく中で、何んとか一貫した東大サッカー部の活動が維持出来ているのは、西本部長の情熱に支えられた平林監督の指導のお陰である。もちろんLB会の支援と伝統の力といったバックグランドはある。しかし、毎年わけのわからない１年生が入部し、逞しい東大サッカー部の４年生として、リーグ戦を闘えるようになるには、①厳しい練習と共に、②数多くのOBとの交流が不可欠である。この二つを、ここ数年の危機的状況の中で何とかやってこれたのは、現在の指導体制の努力の結果である。

新グランド、新部室の完成、そして４年生が二人の中、転落必至といわれながらの都リーグ一部残留。関東リーグ復帰を悲願に掲げる現役にとって、条件は整いつつある。と同時にこの好機を生かして、グランド、部室を最大限に活用したサッカーの活動――社会人チームの再生とサッカースクールの更なる飛躍をはかろうという動きは、大きくその一

歩を踏み出そうとしている。ＯＢの間にも、いろいろな御意見もあろうが、いわば一つの大きな流れのような気がする。サッカーも、学生も変化する。大学教育の中におけるサッカー部のあり方などと、議論するつもりはないが、コトは、情熱を持ち、動ける人々により進行していく。

今後この動きが、どう展開するのか、楽しみでもあり、また大変なことであると思う。一方現役の指導体制にしても、より充実したものが求められている。

まだまだ課題は多いのである。しかし、今回の件では、一つの大きな収穫があった。昨年の６月15日に、部室建設委員会の初会合で、おそらく史上初めてではないかと思われるが、戦後のめぼしい各学年の代表ＯＢが集まり、それぞれ現役時代を思い出して熱心な意見交換がなされた。その結果、募金目標は、６百万円から１千万円へアップしたのである。クールな人が多い東大サッカー部ＯＢでも秘めたる情熱は、尚熱い。それは、１千万円の募金達成に示され、新部室に結実しようとしている。この確かな伝統の力を、これから現役となる諸君は、是非一度は、感じ取ってほしい。

とりとめのない内容となりましたが、ここ数年東京に勤務し、今回の１件をお手伝いしたものとして、雑感を書かせてもらいました。

北海道に転勤となり、部室の完成に立会うことは難しくなりましたが、新部室をベースにした現役及びＯＢの活躍を祈りつつ、筆を置きます。

# Ⅳ　監督・主将から

## 新部室・生かすも殺すも……

監督　　平　林　健　一

農学部グラウンドが昨年５月に拡充・整備されたのに続き、新部室もいよいよ完成の運びとなりました。我々東大サッカー部の新本拠が７年振りにようやく整い、まことに喜ばしい限りです。ホーム・グラウンドとして70年の歴史を持つ御殿下を離れざるを得ぬことは無念なことではあります。しかし、今の我々にとっては、どこであれ、公式戦の出来る専用グラウンドと機能的な部室を持つことは、何にもかえがたく有難いことです。

これまで常に先頭にたって大学との折衝にあたって頂いた西本先生をはじめ、有形無形の様々のご援助、ご協力を頂いたOBの方々、そして貴重なご寄附を賜わった数多くの先輩、関係団体の方々、さらにはサッカー部の要望を容れて種々お骨折り頂いた大学関係者の方々に心よりの御礼を申し上げます。

さて、新部室の完成にあたり、様々の想いが頭の中をかけめぐりますが、そのうち特に二つの抱負を述べてみます。

一つは、東大FC.構想に関してです。これは一言でいえば、東大サッカー部をサッカーが好きな者なら誰もがやれるクラブにしたい、ということです。クラブ内に同好会のチームも含めて、経済学部チーム、駒場チーム等、性格の異なるいくつかのチームを作って、普段はそれぞれのチームごとに適当なリーグに属します。（今は、新体連リーグ、国際リーグ等、大学連盟との二重登録が可能なリーグがいくつかあり、すでに新体連リーグには昨年から加盟しています。）メンバー全員が「自分のゲーム」を持てる訳です。練習は照明付きの専用グラウンドをうまく割り振れば、各チームの都合に応じて時間を定められますし、ロッカー完備の更衣室や12基のシャワーをフルに使えば、時間をずらして利用するのですから、FCのメンバー総数が100人であってもパンクはしないでしょう。練習試合も、電話、FAX、パソコン等完備した事務室を十二分に活用して各チームの要望に合わせて組んで行けます。そして、秋のリーグ戦には、東大代表として、各チームから選抜した選手でチームを組んで臨むのです。このチームはもちろん「勝ち」を第一目標とするチームです。

ポイントは二つあります。まず、「勝つ」ために必要だ、ということです。上の様に間口を広げて入り易く、続け易いクラブにすれば、今までいわゆる同好会に流れていた有望選

手が東大FCに入ることになるからです。幅広い人材獲得が可能になる訳です。

もう一つは、メンバー全員が自分の実力や都合に応じて「自分のゲーム」を持って、各人なりに充実した活動を行えることです。東大でサッカーをやっているものは、皆、FCのメンバーであり、チャンピオン・スポーツとしてサッカーと関わるものから、仲間とボールを蹴る楽しさを求める者まで、様々のサッカー・マンが一緒になって参加できるのです。東大FCは全東大のサッカー愛好者を包括する本当のサッカー・クラブとして、多くのメンバー達の学生生活をより豊かにすることでしょう。時間はかかるでしょうが、新部室と新グラウンドを拠点に、新しい東大サッカーを創り上げて行きたいものです。

二つ目の抱負はミーティング・ルームに関してです。詰め込めば60人も入れるサッカー部専用のミーティング・ルームが出来たので、様々の事が可能です。私がテーマごとに編集したビデオ教材を使って、「頭の練習」を、全員でしょっちゅう行えます。その日の練習テーマをビデオで理解、確認した後に、グラウンドで実地練習が出来ます。練習効率はグッとアップするでしょう。選手達はいつでも好きな時に自分の見たいビデオを見ながら、サッカーについて話す事も出来ます。こうして選手達がもう少し細かくサッカーを考える様になれば、まだまだ伸びるのですが……。ビデオ、ディスカッションだけではありません。簡単な合宿は手軽に行えますし、OBの方々にもグラウンドに遊びに来て頂き（御殿下クラブ、東大LBの復活も考えております。）、一汗かいた後には現役もまじって皆さんで一杯など、ということもいつでも可能な訳です。

新部室（クラブ・ハウスと呼びたい位ですが）、新グラウンド、生かすも殺すも我々次第です。東大サッカーをあらゆる意味で再興する大きな力の一つとして、これを最大限に活用し、使い切ることが、ご協力頂いた皆様への恩返しと心得ます。

## 主将を務め終えて

昭和63年度主将　　大久保　將　之

入部した頃には、まさか3年後主将を務める事になろうとは思っていなかった。今の自分の基準からすれば、とんでもない事を好き勝手にやっていたものだ、と我ながら呆れてしまう。サッカー浸けであった事に間違いは無いのだが、要するに自覚が無かったのである。時の首脳陣がどのような思いであったか、恥じ入るばかりである。

こんな私も主将を引き継ぐと、それまで気にも留めなかった事、当たり前だと思ってい

た事までが、いちいち引っかかるようになった。主将という立場でチームを見る時、これほどまで判断の基準が変わるものかと思った。中学、高校の時とは比較にならなかった。足を折っていた事もあり、自分が思ってもチームがその通りに動かないのが情けなかった。しばしば同僚に“そこまで気にしても仕方がないよ”とか、“カリカリしすぎだ”と言われたものだった。良い意味で気にしなくなったのは、夏合宿に入る頃であったろうか。この頃になって、ようやく判断の基準が安定して来たのだと思う。逆に言えば、それまでは余裕も何も無かった、という事だ。

もう1つ、主将になるまでわからなかった事がある。それは、退部者が必ず自分を経由していく、という事。3年の時までは、退部者が出ても、“ああ、あいつやめたのか”で済んでいた。が、昨年は“一身上の都合で……”とか“お世話になりました……”という電話が、全部私の所に集まって来た。これがたまらなく悲しいのだ。何の電話なのか、受話器を取った時に雰囲気でだいたいわかってしまう。たいてい、え～とかあの～とか口ごもって、“今日限りやめさせて頂きます”と続く。いろいろ言っても相手の気持が変わるはずも無く、“そうか、わかった。元気でな”と電話を切る。その後、練習中何かまずい事でも言ったかとか、強く叱り過ぎたかとか、今までやって来て何でここでやめるのかとか、いろいろ考えさせられてしまうのだ。特に、京大戦から合宿にかけて、何人かがたて続けにやめていったのは、毎年の事とは言えかなりのショックだった。理由はどうであれ、落後者が出るのは気持のいいものではない。

こうして臨んだ秋のリーグ戦では、良い結果を残せなかったが、結局は運が悪かった、ということになろうか。一言だけ弁解が許されるなら、“もし骨折が無かったら”結果は違っていたかも知れない。それはともかく、自分ではやるだけの事はやったつもりであったけれども、どこか足りない所があって、それを勝利の女神に見られていたのであろう。来シーズンは、住谷新主将を全員で盛り立てて、良い結果を残してくれることを期待している。

最後に、特に控えの選手に言っておきたい。努力しても報われるとは限らないけれども、それでも最後までついていって欲しい。必ず何か得るものがあるはずだから。そういう時があっていいはずだから。

## 東大のサッカー

平成元年度主将　住　谷　安　史

東京大学ア式蹴球部創部以来の大事業であるといわれる部室建設の完成に、我々部員一同は喜んでいるとともに、来たるシーズンにこめる思いも盛り上がりつつあります。また、OBをはじめとするたくさんの方々の御力添えと御苦労を心より感謝いたします。

さて、昨シーズンを振り返ってみると、東京都一部リーグ戦7位、そして東京都二部リーグとの入替戦では引き分けでなんとか残留というように、非常に厳しく苦しいシーズンでした。しかし、昨年一年間を通じて我々の得たものは多く、今シーズンにつなげられるように個人個人が自覚をもって自主的に練習に取り組んでいます。

先日あるスポーツ新聞の1面に“3年後に日本サッカープロリーグ化”と書いてあるのに目が止まりました。最近、小学生の間でもサッカーが野球を抜いて日本全国で大ブームになっいます。テレビを通じてワールドカップや欧州選手権でのトップレベルの選手のプレーを見て、夢や憧れを抱きサッカーにひきつけられたのでしょう。日本サッカーのプロ化はその夢や憧れを実現する必要条件の一つであると思います。そこでプロ化にあたって期待したいことがあります。それはプロには“強い”“速い”ことはもちろん観客を楽しませる“面白い”プレーを要求したいということです。ここで“面白い”というのはサッカーをあまり知らない人が感じる“面白さ”というよりはむしろサッカーに通じている人がみて感じる“面白さ”のことを指しています。ワールドカップなどには“面白い”プレーが随所にあり、また強いチームには必ず“面白さ”が感じられます。昨年の天皇杯の試合を何度か見に行きましたが、多くのチームが“強い”“速い”身体能力の高さだけを柱とする“力づくのサッカー”を展開し、さらに“面白くない”事には、そういったチームが上位に名を連ねるのです。日本の上位にあるチームに“面白さ”があまり感じられないのは非常に残念に思います。そして“面白さ”の感じられないようなサッカーは、世界のサッカーには通用しないのです。同じようなことが東大のサッカーにもあてはまります。東大サッカー部員は都リーグの中でも必ずしも身体能力の面では恵まれていません。つまり東大が、毎年高校で活躍した選手が多く入学してくる大学に勝つためには“強い”“速い”サッカーを目指しても良い結果は望めないでしょう。そこで我々は身体能力の向上はもちろん、世界のトップレベルの試合を見て“頭”の方も鍛え、それをまねすることによって個人とチームのレベル向上を図っています。昨シーズンは結果は良くありませんでしたが東大の目指すサッカーが見られた試合もありました。今シーズンは、この東大の目指すサッカーを90分間展開し、関東リーグ復帰を目指し頑張っていきたいと思います。

## V　OBからの近況

| | | |
|---|---|---|
| 大正15年卒 | 出田節雄 | 本年は86歳です。足腰は弱りましたが、サッカーで走り回ったために元気で居れるのです。大正12年の正月には第１回の試合に参加したのが印象に残ります。 |
| 昭和２年卒 | 木村康一 | 去る５月27日が満88の誕生日ですが、足が10mぐらいしか利かなくなったので、車イスの助けを必要としています。 |
| 昭和９年卒 | 和田重暢（平成元年２月に逝去） | 50年前の私共の現役の時代よりも筋肉の鍛え方が不充分のような気がします。強靱な肉体と精神力の鍛練を望みます。 |
| 昭和11年卒 | 菊池武美 | 相変らず元気にしています。（健康保持の目的で、老齢（78歳）に拘らず、木曜を除いて毎日午前中診療しています。 |
| 昭和11年卒 | 服部正策 | 思い起せば遥か昔の事となりますが、昭和一ケタ代の東大サッカー部の活躍ぶりの再現を目標として、大いに頑張って戴きたいと願って居ります。私自身について言えば雀百まででSOI（旧制高校時代のサッカー愛好者の集り）に参加して、今尚ボールを蹴っています。いつまで出来ることやら。 |
| 昭和12年卒 | 稲川　達 | 既に現役を退き、身体は一見健康そうに徐々に老化が進行して行きます。下手なゴルフも時折何とか……。 |
| 昭和12年卒 | 大内　弘 | この間申し上げた通り、一部復帰すれば100万円寄贈します。ボート部、野球部を見れば不可能ではない筈。 |
| 昭和13年卒 | 種田孝一 | 近年はプレイを致しておりません。現役の人達、及び若いOBの方々の御活躍を望みます。 |
| 昭和13年卒 | 徳田晃一 | 皆様の御検討を祈ります。 |
| 昭和14年卒 | 阿部栄夫 | 若い時のサッカーによるのか、10数年来続けている早足散歩のためか、２～３年前から階段を昇る時膝が痛み困っていましたが、昨秋低周波治療器を見つけ半年 |

続けた結果完治しました。

| | | |
|---|---|---|
| 昭和14年卒 | 小林卓郎 | 昨年の誕生日（63.2.26）に、生まれてから何日になるのかなと思い、数えてみたら26,663日になった。鏡をのぞき込んで、「へー、これが73歳２万６千日の顔か」としばし感無量。<br>海抜1,000mの八ケ岳山麓に移り住んで13年、地域の人たちにたすけられ元気に暮しています。70歳で免許をとり、ポンコツ車で毎日走り回っています。 |
| 昭和14年卒 | 後藤典夫 | リタイヤー以来、中国語と日本語の勉強に専心して居ます。時にはサッカーも。 |
| 昭和16年卒 | 有泉俊亮 | いつも御通知有難う、部活動も楽じゃないですね。毎年の援助は出来ませんでしたが、今度は設備の費用なので寄附します。私はもう出掛て行く元気はありませんが、部員の皆さん頑張って下さい。 |
| 昭和16年卒 | 笹間正義 | 頑健でいたのに―昨年夏心筋梗塞にやられましたが、すっかり回復、ボールを蹴っています。 |
| 昭和17年卒 | 柏木大安 | 元気ですがサッカーをやるには足が弱りすぎました。しかしスポーツの中ではやはりサッカーに最大の関心があります。現役はもう少し強くなって下さい。 |
| 昭和19年卒 | 大貫雅敏 | 12年前から、旧制成城高校もSOI（サッカーOBインターハイ）に参加、２度優勝しました。ほとんど毎週SOIメンバーと共に、ボールを蹴っています。往年のプレーはできませんが、年相応に健在です。 |
| 昭和19年卒 | 加藤信幸 | 55歳を過ぎて２度の開腹手術を受け非常に快調、医学の進歩に感謝しています。ボケない程度に本を読み、昔所属した田辺製薬のサッカーチームの会合に出て楽しんでいる昨今です。 |
| 昭和19年卒 | 須賀敏孝 | 上野で変らず元気に仕事しています。お近くにお出での折には是非お立寄り下さい。 |
| 昭和22年卒 | 長島　喬 | 40年前の御殿下グラウンドが無くなる事は残念です。 |

| | | |
|---|---|---|
| | | 最近大きいボールは全く無縁なれど、母校のサッカー部故仕方なくただただ寄附に応ずるのみ、但し、寄附者の名前を見て昔の仲間の健在を知る楽しみはあります。 |
| 昭和22年卒 | 渡辺洋三 | 東大教授を定年退官したあと、帝京大学に移ってまだ現職です。サッカーの方はそろそろ定年を過ぎそうですが。 |
| 昭和24年卒 | 後藤大三 | 60すぎてもボールを蹴れる幸福をかみしめています。何とか東大も昔日の隆盛をとりもどして貰えればと応援を惜しまぬつもりです。 |
| 昭和24年卒 | 馬渡一眞 | 一昨年春に身体の調子をくずして以来サッカーはやるものではなく、みるものになってしまいましたが、SOIなどの話が出るたびに、残念な思いをしております。皆様の御健闘を祈ります。 |
| 昭和25年卒 | 天野晴郎 | 昨年5月末で退職。もっぱら楽しむサッカーをやって居ります。関東一部復帰を達成して下さい。 |
| 昭和26年卒 | 中村一夫 | 東大サッカー部を夢見て入学した昭和23年に関東大学リーグ（一部）で優勝出来て幸せでした。現役の皆さんも優勝を目標に頑張って下さい。 |
| 昭和27年卒 | 菊井維正 | '88 6／29に東銀をやめ、東銀グループで新設した東銀システム開発㈱に移りました。 |
| 昭和28年卒 | 柴沼明 | 旧制高校OB中心のサッカー活動に参加し年寄りサッカーを楽しんでおりますが、LBの方も多数おられます。慶大BRBの活動を参考にOB（LB）の再編成、集合、交流を意図的に考えてもよいのではないかと思っております。 |
| 昭和29年卒 | 川辺正行 | 会社は変りましたが、相変らず新日鉄大分製鉄所の中で仕事をしています。支店内にサッカー部を造って4年目です。 |
| 昭和29年卒 | 長山樹 | 昨年のLB総会はグラウンド開きで例年になく50歳以 |

上のOBが多く集りました。各年代共、大勢参加されるよう望みます。私はSOI、四十雀クラブでサッカーを楽しむ他、ゴルフの方でも多忙です。

| | | |
|---|---|---|
| 昭和29年卒 | 新倉雄三 | SOI（旧制高校OB）での諸先輩との話題は何といっても念願の関東リーグ復帰です。心から現役諸子の御健闘を祈ります。 |
| 昭和30年卒 | 藤本鉄也 | サッカーは考えていた以上に歳をとってもそれなりに楽しめるスポーツと再認識しています。 |
| 昭和31年卒 | 牛木素吉郎 | 1990年のイタリアでのワールドカップ・サッカーで何か一仕事したいと考えています。 |
| 昭和31年卒 | 岡野俊一郎 | 1998年冬季五輪長野招致その他、オリンピック委員会の仕事で多忙を極めています。尚一昨年10月㈶日本サッカー協会副会長に就任しました。 |
| 昭和31年卒 | 楠田喜宏 | 一昨年11月アメリカより帰国致しました。 |
| 昭和31年卒 | 西本晃二 | 部長を仰せつかってから早くも7年目、なんとか現役の関東リーグ復帰を果したいと思っています。OBの方々の御支援をお願いします。 |
| 昭和31年卒 | 浜口博彦 | 海外出張のため、寄附もこの御返事も遅れましたことをおわびします。 |
| 昭和31年卒 | 帆足祀夫 | 勤めが伊豆の湯ケ島で単身赴任です。最近テニスをはじめましたが、腹が出ていて、仲々思うようにいきません。 |
| 昭和32年卒 | 倉田日出男 | S49年1月より大阪勤務のため、皆さんにも大変ご無沙汰していますが、よろしくお願いします。 |
| 昭和32年卒 | 原靖二郎 | 部室建設の成功を期待して居ります。極力若手OBで支援したいものと思います。勤務先は東京テレポート予定地の真近にあります。 |
| 昭和33年卒 | 小林昭夫 | 床暖房などの営業にたずさわりながら、休日は四十雀チームで真っ黒になっています。 |
| 昭和34年卒 | 高田宗昌 | レフリーのインスペクターとインストラクターでサッ |

| | | |
|---|---|---|
| | | カーとつながっています。 |
| 昭和35年卒 | 福田泰二 | 昨年来、膝の故障でボールを蹴る機会が少なくなっていますが、だいたい治ったので、今年はなるべくグラウンドに出るつもりです。 |
| 昭和36年卒 | 高場真平 | 一昨年10月糖尿病と診断され、食事と運動療法で約10kgトリミングしました。殆んど毎日3kmジョギングしてます。 |
| 昭和37年卒 | 名越英夫 | 年に数回のサッカー、それも15分ハーフ程度を別にすると、もっぱら観る方に回っています。あとはLion's club（百獣の王）のゴルフ、水泳等下手の横好きを楽しんでいます。 |
| 昭和39年卒 | 宇尾誠一 | いろいろ問題のあるアセアン諸国を担当しています。各国にある三菱系工場・販売店訪問のため、グラウンドならぬアセアン地域を走り回っています。 |
| 昭和40年卒 | 畔柳信雄 | 先日、機会があって御殿下グラウンドに立ち寄ってみましたが、私達が毎日走り、蹴り、スベッタグラウンドは一変しておりました。時々昔の情熱を思い出しますが、自ら蹴ることはほとんど無くなりました。<br>新しいグラウンドでの皆様の御健闘を心より祈っております。 |
| 昭和40年卒 | 太田直幹 | 関東リーグ復帰を楽しみにしています。ご健闘下さい。 |
| 昭和41年卒 | 藤井俊治 | 鹿島の四十雀チームでサッカーを楽しんでいます。 |
| 昭和44年卒 | 石田祐幸 | 最近息子の小学校のサッカースクールのコーチをやっております。しばらくの間のブランクの後でボールの感触を楽しんでいます。 |
| 昭和44年卒 | 大塚　隆 | リーグ優勝を目指し張切ってプレイして下さい。 |
| 昭和45年卒 | 吉崎英雄 | 国際・国内共に目まぐるしい情報通信の変革の中で、国際会議、二国間協議の対応、国内での準備等々に忙殺されています。 |
| 昭和47年卒 | 黒沢秀樹 | 関東リーグ復帰目指して頑張って下さい。 |

| | | |
|---|---|---|
| 昭和47年卒 | 手島直幸 | 草サッカーチームで月に1～2回蹴っています。新部室、グラウンドがOBの交流の場となることを願っています。子供が2人とも女の子なのですが下の珠恵には球を蹴らせたいものです。 |
| 昭和49年卒 | 内田純司 | 現役諸君、レギュラーであろうとノンレギュラーであろうと、上級生であろうと、下級生であろうと、それぞれの健闘を祈ります。 |
| 昭和50年卒 | 天野　裕 | 昨年5月2日南米のチリに赴任致しました。裏面の住所、勤務先のTELNo.は在日中のものです。帰国後（3～4年後）の住所は変わる可能性が有ります。<br>天野郁江（妻）記 |
| 昭和50年卒 | 上原施門 | 仕事の方は研究所から特許の方に移りました。家庭の方は平穏無事、平凡な毎日を送っています。サッカーの方は、上の娘（小2）と近所の女の子たちを集めて女子サッカーのコーチを日曜日にしております。 |
| 昭和50年卒 | 遠藤　譲 | 新任以来12年勤めた原市中を「卒業」し、大石南中という市内随一？の大変な学校に移り、奮闘中です。参加協力できなくて、申し訳ありません。 |
| 昭和53年卒 | 青山研一郎 | 海外を行ったり来たりの日々を送っています。一昨年長男誕生。東大サッカー部を目指させたいと考えています。 |
| 昭和53年卒 | 本庄孝志 | まだ役所のサッカー部でボールを蹴っていますが、最近は3歳の息子とボールを蹴る方が多くなっています。 |
| 昭和54年卒 | 岸戸　健 | もう卒業してから10年ですが、毎日昼休みにはサッカーをやっています。 |
| 昭和54年卒 | 吉野元章 | 御殿下クラブの試合はないし、ダイヤモンドサッカーの放映は終了するし、私のsoccer lifeは着実に失われているようです。 |
| 昭和56年卒 | 田中　聡 | 本年7月より米国留学（会社a／cのMBA取得コース）の予定です。 |

| | | |
|---|---|---|
| 昭和56年卒 | 松元明弘 | 昨年４月より、学生・職員として通算11年過ごした東大を離れ、東洋大に移りました。リーグ戦でもし東大と東洋大が対戦したら……。やはり東大を応援してしまうでしょう。 |
| 昭和56年卒 | 山川健一 | ’85年６月から’88年６月までサウジアラビア紅海側に位置するヤンブー工業都市で冷却用海水をプラントに供給するパイプラインの建設に従事していました。向こうで子供達（７～９歳）に英語でサッカーのコーチをしていました。 |
| 昭和58年卒 | 熊倉政宣 | 溶鉱炉休止後の室蘭製鉄所を支えるべく冷鉄源溶解法の実機化を担当しています。 |
| 昭和58年卒 | 後藤　啓 | 元気です！ |
| 昭和58年卒 | 中谷知弘 | 月に１or２回会社でサッカーを続けています。 |
| 昭和58年卒 | 橋本晴充 | 海外及国内パワープラントの現地工事取纏めで東奔西走しつつ、楽しい経験を積んでいます。 |
| 昭和60年卒 | 仙石雄三 | 特記事項はありませんが、元気に過ごしております。 |
| 昭和63年卒 | 末永　浩 | 王子製紙㈱江別工場のサッカー部に入り、サッカーを続けています。<br>皆様の御健闘をお祈りします。 |
| 昭和63年卒 | 谷本真人 | ’88年10月実機訓練のため渡米しました。 |

# 編　集　後　記

闘魂（部室建設記念号・ア式蹴球部名簿）を無事、発行にこぎつけることができました。しかし、闘魂今号については、様々な制約のもと必ずしも満足のいくものとならなかったこと、また、編集作業の遅れから、２月下旬の発行予定から大幅に遅れてしまったことを、ここに深くお詫び申し上げます。

今回の発行にあたりましては、多くの方々にお世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。まず、お忙しい中、「闘魂」の内容をひきたたせるような原稿をお寄せ下さった方々、また、表に出ないところで、御指導、御鞭撻下さいました先輩の皆様ありがとうございました。

次に、今回の企画の趣旨に御賛同下さり広告をお載せ頂いた各企業並びに担当者の方々、また御尽力下さった御先輩方、ありがとうございました。

そして、編集発行にあたって親身に相談にのって下さった鳩見さん、吉田さんはじめ東大出版会教材部の皆様、本当にありがとうございました。

最後に、編集作業の一部を部員各人で分担するなど、今回の発行が部員全員の協力によってはじめて可能であったことを記し、編集後記とさせて頂きます。

平成元年３月

東京大学ア式蹴球部　昭和63年度　主務　　斉　木　康　二

掲載事項に訂正・変更などのございます方、又、消息不明の方々について何か御存知の方は、下記あて御一方下さいます様お願い申し上げます。

〒113　東京都文京区本郷七丁目三番一号
東京大学運動会内

東京大学運動会　ア式蹴球部
TEL　03－812－2111　(内) 2511

東京大学　昭和63年度

闘　魂　部室建設記念号
昭和63年度名簿

発行　東京大学運動会　ア式蹴球部
編集　斉木康二、山田祈一

印刷　東大出版会　教材部

# わたしたちの紙には、ハートがあります。

人間は、とっても小さな頃から紙とつきあい始めます。折ったり、切ったり、描いたり。おとなになっても、紙との親しい関係は途ぎれることがありません。まるで空気か水のように、紙は暮らしにとけこんでいます。わたしたち王子製紙は、そんな製品をつくり、そしておとどけできることに大きな誇りを感じます。これからも、紙と人とのハートフルなつながりを大切にしたい王子製紙です。

未来へ残す。
未来を創る。

OJI PAPER CO., LTD.

**王子製紙**

〒104 東京都中央区銀座四丁目七番五号 ☎03(563)1111(代)

# 天婦羅 日本料理

# 上野 山下

上野不忍池畔に明治三十九年創業以来、
江戸料理の粋を伝えて七十九年。
上野の森や不忍池の四季折々の風によ
せた天婦羅・日本料理をお楽しみ下さい。

電話　(03)831—7810

- 国鉄上野駅3分
- 京成上野駅前
- 地下鉄銀座線・日比谷線（上野駅3分）
- 地下鉄千代田線湯島駅5分

トクだねダイヤル
0088

# 早いハナシ、話が安い。

ただ今、東京～福岡間の
新幹線沿いでサービス中。
'89夏、さらに東北新幹線沿いに
盛岡までサービスエリア拡大。

お申し込み・お問い合わせは、フリーダイヤル(無料)
0088-88 または 0120-0088-82へ。
受付時間は、月曜～金曜9:00～20:00まで。
土曜・日曜・祝日は9:00～18:00まで。

お申し込み用紙は、サービスエリア内のJR主要駅または最寄りの日本テレコム代理店、特約店にも用意してあります。

お断り/登録時にNTT局内の工事費として、1回線につき2,000円がNTTから請求されます。

もっと話せるように。
JAPAN TELECOM 日本テレコム
〒102 東京都千代田区九段北四丁目1番7号



# 歌声が聞こえますか…

紙 温かさを伝えます

十條製紙は、国際的な視野で紙の大切さとその使命を考えつづけます。

十條製紙
〒100 東京都千代田区有楽町1-12-1(新有楽町ビル) ☎(03)211-7311

# まぶしい人。

## とまどうことなく、超然と生きたい人に、いま第一生命がお手伝いできること。

母として、父としてのあなたは、お子さまにとってまぶしい人ですか。日頃しっかりとした考え方を持って、お子さまと接していますか。最近の調査によると、子育ての方針として、「お金をかけても手間はかけない」という考え方が四十代の母に多く、「お金はかけずに手間をかけて育てたい」という考え方が二十代の母に多いという結果がでています。子供の年齢差を差し引いても、若い世代に新しい育児観が育ってきているのは確かなようです。ちなみに、学校以外の教育にかけるお金は、ほんの十年前と比べても、6倍になっているそうですから、その反動かもしれません。そんな子供たちが成人する21世紀は、はたしてどんな社会になるのでしょうか。人生に確かなビジョンを持つ人のために、いま第一生命はライフデザイナーであろうと考えています。あなたの人生設計にあわせて、オーダーメイドの保障や、様々な財産形成プランをご用意。また、ご家族の健康・教育・住宅・老後などについてもライフデザイン研究所(LDI)などで情報収集をすすめています。全国6万人のセールスマンを通じて新しい視点からのアドバイスができるものと思います。

本社(日比谷)/東京都千代田区有楽町1-13-1 TEL.03-216-1211

---

夢をかたちに 信頼と創造の 富士通

富士通

# ライバルとの差がここにある。

**16階調プラズマディスプレイを搭載。FM R-50LT新登場。**

ディスプレイを一目見ただけで、ラップトップの新しい形FM R-50LTの実力がわかるはずだ。
たとえば、16階調表示を実現した高解像度プラズマディスプレイ、
そして高速・大容量システムに応える充実のハードウェア。FM Rシリーズの中核マシン
FM R-50の優れたアーキテクチャと豊富なソフトウェア資産を、そのままに受け継いだ。
これが、待っていたラップトップパソコン、FM R-50LT。ライバルをリードして、今、新登場。

**FM R-50LT**

NEW LAPTOP

LT2 ¥428,000 1MB FDD×2内蔵
LT5 ¥568,000 1MB FDD×1、20MB HDD内蔵

できること、ひろがれ。

選べるハード。使えるソフト。

**富士通のパソコン FM R シリーズ**

お問い合わせカタログ請求は――――富士通株式会社 FM販売推進部 〒100 東京都千代田区丸の内1-6-1 ☎(03)216-3211(代)

New Motoring Wave 新技術を、ときめきに。 MMC 三菱自動車

# Sedan Freedom

セダンの一線を美しく超えて。

CAR PLAZA

エテルナ2.0 DOHC ZX（アルミホイールはメーカオプション）
クルマが好き、だからいい運転

DAIKIN

ダイキン工業株式会社

東京支店

〒163 東京都新宿区西新宿2丁目6番1号 新宿住友ビル
新宿住友ビル内私書箱第37号
電話 (03)344-8111(ダイヤルイン)

# 日産自動車株式会社

住所／〒104 東京都中央区銀座６－17－１
電話／０３（５４３）５５２３(大 代 表)

# 三井石油化学工業株式会社

住所／〒100 東京都千代田区霞ヶ関三丁目２番５号

信頼に応える店!!お気軽にお立寄り下さい

ウエア・シューズ

TIGER adidas HARIMAYA
MIZUNO Champion products
new balance Nishi

当店オリジナル
敬老の日全国恒例大会
問い合せ 日本健歩協会事務局
〒181 三鷹市中原4 27 3 TEL0422 44 3850

●アディダス
●アシックス 特約店
●ハリマヤ
●ニシ

井の頭線駒場東大前駅前通り
日本健歩協会会員

有限会社 倉本スポーツ産業
目黒区駒場1 19 19 TEL466 7389・7380

NIPPON STEEL

# エネルギーシンフォニー

鉄をつくり続けた長い歴史の中で、
新日鐵はじつに多くのことを学びました。
研究開発力、生産技術力、市場調査力、
営業企画力、事業推進力…
さまざまな　力　が
たっぷり蓄積されています。

その　力　をエネルギーに、
わずか3年ほどの間に
70以上もの新事業の花を咲かせました。
新日鐵は、エキサイティング。
鉄を核に、
これからも、咲きつづけます。

新日本製鐵株式會社